

# まちづくりシンポジウム 議事録

日時:平成 24 年 2 月 12 日(日)

場所:カノラホール 小ホール

## 目 次

1. 開演および市長挨拶
2. 第 1 部 基調講演(倉田直道/工学院大学教授)
3. 第 2 部 パネルディスカッション  
《パネリスト》
  - ・ 今井瑞穂/(有)フキドウ専務取締役
  - ・ 片倉隆幸/建築家、片倉隆幸建築研究室代表
  - ・ さとうわきこ/絵本作家、小さな絵本美術館主宰
  - ・ 新村邦武/前西掘区長《コーディネーター》  
倉田直道/工学院大学教授

### ○ 司会(小口博巳 岡谷市建設水道部長)

長らくお待たせいたしました。

ただ今から「まちづくりシンポジウム」を開催させていただきます。

私は、全体の進行役を務めさせていただきます岡谷市建設水道部長の小口でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、講演中は、携帯電話の電源をお切りいただくか、マナーモードにご設定いただきますよう皆様のご協力お願い致します。

それでは、はじめに今井市長よりごあいさつを申し上げます。

### ○ 今井市長

皆さん、こんにちは。

まだ、寒い日が続いているわけですが、そうは言いますが、今日あたりは日差しの中に春を感じる…そんな日でございます。

そのような中で、本日は「まちづくりシンポジウム」を開催いたしましたところ、多くの皆様にご参加いただきまして誠にありがとうございます。

また、皆様には、日頃から夫々のお立場で岡谷市政の推進、まちづくりに参画、ご協力をいただき

ておりますことに深く感謝を申し上げます。

私たちの街・岡谷市におきましても、少子高齢化による高齢化の進展、また、人口の減少、そして、土地利用の変化、また、環境への対応ですとか長引く景気の低迷によります財政的な制約といったことで、街を取り巻く環境は大変に大きく変化をしてくれておりまして、それがまちづくりを進める上でも大きな転換期を迎えているというふうに言われているところでございます。

このような状況の中で、都市基盤の整備をはじめ、住み良い環境づくりですとか街の魅力や地域力を高めたり、誇りや愛着の持てる街を育てていくために、市民の皆さんとともにこれからの岡谷の街のありよう・あり方をともに学び、考えていきたい。そして、皆さんとともに、より快適で住み良いまちづくりを進めていきたい。そんなふうに思っているところでございます。

今回は、そのためのきっかけづくりになればという思いから、この「まちづくりシンポジウム」の開催をさせていただきました。本日は、諏訪市のご出身でございまして、工学院大学建築学部まちづくり学科の主任教授であります倉田直道先生をお招きし、講演をいただきます。そして、講演の後に、市民の皆様とパネルディスカッションを予定しているところでございます。是非、皆様にはご聴講いただきまして、まちづくりに対しての認識を深めていただければと、そんなふうに思っているところでございます。

また、新年度、平成24年度でございますけれども、やはり、そうした状況を受けまして、皆様とともにこれからの岡谷のまちづくりを考えていくための懇談会ですとかワークショップといったものの開催も予定をしております。誇りと愛着を持ち、住み続けたい街・岡谷。そんなまちづくりを皆様とともに作り上げて参りたいと、そんなふうに思っておりますので、是非、皆様には、こうした機会に積極的にご参加いただき、認識や議論を深めていただければと、そんなお願いを申し上げます。

最後になりますけれども、本日のシンポジウムが皆様にとりまして、有意義なものでありますよう心から願ひまして冒頭の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願ひ申し上げます。

## **第1部 基調講演**

### ○ 司会

続きまして、第1部の講演に入らせていただきたいと思います。

講師の倉田先生のご紹介をさせていただきます。倉田先生は、諏訪市にお生まれになり、建築設計や都市開発などの研究と実践を重ねられてこられました。詳しいご経歴につきましては、お配りしております資料の「講師プロフィール」をご覧くださいと思います。現在は、工学院大学建築学部まちづくり学科の主任教授であり、全国各地のまちづくりや都市開発関連の計画策定や設計を行っていらっしゃるまちづくりの専門家でいらっしゃいます。

それでは、倉田先生、ご講演をよろしくお願ひいたします。

**演題「素敵なまちを創るために私達は何ができるのか？」**  
**～岡谷を素敵なまちとしていくために、市民はどう取り組めば良いのか？～**

工学院大学建築学部まちづくり学科の主任教授  
倉田 直道

ただいま、ご紹介いただきました倉田でございます。

先程、ご紹介いただきましたように私は長野県の諏訪で生まれ育っております、その後、この地には生活はしておりませんが、やはり、時々こちらに戻る機会もございまして、特にまちづくりというようなことを専門にしていることもありまして、この地域が少なくとも私が子どもだった頃に比べて、大きく変わっていく変化というものを外から見えてきたと言っていると思います。

近年、この地域、諏訪市でありますとか、茅野市でありますとか、そういった所から、地元出身だということで色々とお話をいただいて、まちづくりのお手伝いをさせていただくような機会も増えてきております。そういう中で、今日、岡谷市の皆様にまちづくりの話をさせていただく機会をいただきまして、非常にありがたく思っております。今日は岡谷市のまちづくりについてお話をすることではあるのですが、実は、この後半で、シンポジウムという形で地元の皆様と一緒にお話をさせていただく機会がございまして、そういう意味では、岡谷のことについては、今日出ておられる皆さんの方が、よりまちづくりについては、あるいは地元のことについては詳しいということで、私はどちらかといいますと、もう少し岡谷市というところに焦点を当てるというよりは、今、日本を含めて、ある意味では世界的に共通の動き、あるいは共通に抱えている課題がありまして、そういう意味で色々な取り組みを少し皆さんにご紹介し、岡谷市のまちづくりを考える時のきっかけなり手掛りにさせていただけたらということを感じております。ということで、私のほうから少しスライドなどを使いながらお話をさせていただきます。

私に与えられたテーマが「素敵なまちを創るために私達は何ができるのか？」ということでありまして、先程言いましたように、なかなか岡谷市そのものに対する処方箋というものは、いくら私が色々専門家であってもそう簡単にはできません。そういう意味では、少し皆さんにこのことをこれから考えていただくという意味で色々とお話をさせていただくというふうに考えていただければと思っています。(パワーポイント\_スライド No.1)

まず、今、申し上げましたように、岡谷市も含む、いろんな意味で街が抱えている共通の今の状況ということをお話したいと思っておりますけれども、先程、市長さんからお話でありましたように、やはり急激な少子高齢化というものが進んでおりまして、それから、世の中全体が人口減少の時代に入ってきているということでもあります。(パワーポイント\_スライド No.2)

ここで、交流人口なんていう言葉が出てきておりますけれども、これまでの都市というものは、都市が発展しているか、成長しているかというのは、人口が増えているか、増えていないかという比較的量的な視点で街の成長、発展を評価していたところがありますけれども、やはり、人口が確実に少

なくなっていく時代にあっては、それ自体が、必ずしも都市を評価する指標にはなり得ない。そういう中で、最近では交流人口という言葉が使われるようになってきています。これは、わかりにくいかもしれませんが、そこに生活している人だけではなくて、そこを訪れる人達、逆に言えば、非常に気持ちの良い素敵な都市には外からも人が積極的に訪れるであろうということがあります。そういう意味で、交流人口というのは大事な切り口になってきたりします。

あとは、皆さんご承知だと思いますけれど、いわゆる環境問題というのが非常に深刻な状況になってきているわけでありまして、それに対して、国とか世界、国際的なレベルで取組まなければいけないこともありますけれども、我々の身近な生活の中でも、この問題を抜きにしてまちづくりを考えることはできない時代にもなっています。

それから、人口の話も関連するかもしれませんが、我が国の経済というものが従来のように右肩上がりの、非常に高度成長に象徴されるような状況から、成熟した右肩上がりとは違う時代に入ってきている。そういう時代のまちづくりというのも考えなければならないということになっていると思います。

それは、下に書いてあることと関連するんですけど、「量的な拡大」、人口なんかもそうなんですけれども、「量的な拡大を目標とした時代から生活の質の向上を目標とする時代へ」と確実に入ってきているということだろうと思っています。

そういう意味では、これから岡谷市のまちづくりを考える場合も、こういった視点、こういった背景も一度確認しておく必要があるんじゃないかと思っています。それと同時に、これも岡谷に限った話ではなく、全国共通した課題でもありますし、もう少し世界に目を向けますと、日本より早く、特にアメリカでは、この問題をもう抱えておりました。私どもまちづくりをやってきて、色々な形で関わってきて、実はアメリカ辺りで起きてたこと、取り組んでたことというのは、日本で、時差が10年とか20年近くあったりしますが、非常に似たような状況というのが日本でも抱えているということがありまして、ここに書いてある課題というのは、非常に大きな問題あるテーマだというふうに考えております。

これは、端的に言いますと、車社会の進行というのが、非常に象徴的でありまして、やはり地方都市を大きく変えたといえるものだと思います。そのことによって、そこに生活している人達のライフスタイルというものが大きく変わりましたし、同時に人々の生活行動が非常に広がってきた。これは決して悪いことばかりではございませんし、色々行動範囲が広がるということは、生活を豊かにしていく一つの要素でもあるわけです。同時に、自分の意思で好きな所に行けるということも、生活から見ると便利さという点では生活が非常に向上したと部分と考えられるわけです。(パワーポイント\_スライド No.3)

一方で、それによって失ったものというの、実はかなりあるということがございます。これが象徴的に表れているのが、この岡谷もそうだと思いますけれども、従来、街の中心でありました中心市街地といわれる所が衰退し、それと併せて、郊外のどちらかという幹線道路沿いの商業施設なり、場合によっては、住宅が…岡谷の場合は、それほどひどいというか、それだけ外へ発展していくようなスペースがそれほど無いということで、それほど顕著にでていませんけれども、他の地方都市に行きますと住宅も商業もドンドン街の中心から外へ出て行くというような状況が、やはり起きておりま

す。

これは、特に今申し上げたように車が我々の生活の中に入り込んできたことによって起きていることでありますけれども、その結果、ご存知のように、街の中心が、従来、街の顔でもあった商業地、商店街が、非常にシャッター通りといわれるような空き店舗の多い通りになってしまったりというようなこともありますし、それから、元々、街の中心に住んでおられた方、都心の人口というものが少なくなってしまうというようなことがあります。それから、岡谷市にはそれほど顕著に現れていることではございませんけれども、やはり都心から郊外に市役所が移ったり…これは簡単にいうと駐車場が必要になってくるとかですね…そんなようなことがあって、病院が郊外に出て行ってしまうとか、市役所もそうですね、そういった庁舎が出て行ってしまう…そういう市民にとって不可欠な公共施設なども外に出て行ってしまうというようなことも現実には起きています。その結果、街の一番都心とよく言えますけれども、その街のハートの部分ですよ、その部分が非常に荒廃してしまっているというのが、日本の多くの都市の現状じゃないかなというふうに思います。

一方で、郊外は、ご承知のように、郊外型の色々な大型店とかですね、全国のチェーン店とかというものの店が、ロードサイドに沢山出来たりというようなことが起きてますし、それと同時に、併せて、これは特に地方都市の場合はですね、やはり大都市とは違うのはですね、街の中心はあるのだけれど、その近くには、非常に豊かな自然…これは、農地とか田園風景なんかも含めて、そういうものが身近にあるというのが、これまでの地方の良さだった。そこが、新しく、街の中心が衰退するとともに、ドンドン開発が広がっていくというようなことが起きているわけがあります。

これが、ある意味では、日本の街を大きく変えてしまったし、特に、見た目ということ言えば、非常に街自体が、荒れた状態になってしまっているということが言えると思います。今申し上げたことを例でご紹介しますと、これが「どの街だ」ということを改めて言っても意味が無いくらい同じような駅前商店街の状況というのがですね、全国津々浦々あるというのが現状でございます。敢えて、岡谷の写真は使っておりませんが、皆さん、「岡谷ではどうだったかな？」ということをちょっと考えていただければいいかなと思います。こういう状況であります。(パワーポイント\_スライド No.4)

先程申し上げましたように、地方都市というのはですね、非常に身近なところにこういった田園風景も含めて豊かな自然があります。ここは、ちょっとたまたま静岡の写真なんで茶畑ですけども、それぞれ特徴的な田園風景なりがあったということでもあります。(パワーポイント\_スライド No.5)

そういったところが、実はこういうふうな形で郊外の幹線道路沿いというのは変わってきておまして…これも皆さん「諏訪のインターの辺りかな？」と思うかもしれませんが、違います。(パワーポイント\_スライド No.6)これは、静岡県の掛川というところでございますけれども、本当に全く同じような風景、これだけ見るとどこかわからないというのが現実でして、こういう風景が日本中蔓延しているということになります。同時に、先程申し上げましたように、大きな駐車場を備えた商業施設ができています。(パワーポイント\_スライド No.7)これが、ある意味では、中心市街地の商業を衰退させる大きな原因にもなっていることは確かでございますけれども、後ほど紹介しますが、やはり本当にそれで良いのかなということは、是非考えていただきたいということがございます。

ここで今日もどちらかというと岡谷市の皆さんにですね、是非、一緒にまちづくりをやりましょうとい

うことを皆さんにご提案したくてここに来ているわけですが、改めて、なぜ、そんなまちづくりなんかをやらなければいけないのかということがあります。(パワーポイント\_スライド No.8)ここに挙げているようなことを私のほうで考えているわけですが、一つは、地域の価値の発見と共有というのは、地域に暮らす人々が、価値というとわかりにくいかもしれませんが、魅力であるとか、その土地らしい住んでいて良かったと思われるもの、そういったものを発見して、それをお互いに共有できるようなものに育んでいく…それをまちづくりというふうに一般的には言っているわけでありです。(パワーポイント\_スライド No.9)ただし、ここで非常に大事なものは、時代とともに、色んな意味で社会の価値観というものが変化しているわけです。先程申し上げたように右肩上がりの高度成長期の我が国におけるその時の価値観というものは、おしなべて人々は、色んなものを持ちたいということ、量に対しての…特に、日本が、戦後、国が豊かになってくるプロセスというのは、まさにそのことだったと思います。3Cなどと言われるように皆平均的に色んなものを持つことで、自分達の生活が豊かになったということを実感した時代だったと思いますけれども、ここへ来て結果として、バブル経済が崩壊するというようなことがあったりしましたけれども、やはり、それだけじゃないんじゃないかと、もう少し生活における豊かさって何だろうということを考えるようになってきていることがありますし、同時に、社会的にも環境の問題というようなことが言われるようになってきて、社会の価値観というものが随分変わってきたなという気がしております。ですから、そういう意味で、こういう時代、先程も申し上げたような少子高齢化というようなことも含めた時代の変化というものを背景として、そこに住んでいる方自らが、地域のまちづくりの資源を発見したりとか、それを評価していくということが、まず、改めてまちづくりをやっていく際に必要になってくるんじゃないかなと思っています。

それから、やはり最終的にまちづくりが行き着く先ということではいいと思いますと、ここでアメニティという言葉を使っていますけれど、ちょっとわかりにくいかもしれませんが、簡単に言えば、快適性、心地良さということで、暮らしやすさと採っていただいて良いと思います。(パワーポイント\_スライド No.10)そういうものをどうやって守って、作り上げていくかということが大事になってくると思います。その時に、やはりこれからの時代、特に少子高齢化が進んでくるような時代になってきますと、老若男女すべての市民にとって、安心して安全な日常的な暮らしやすさといったものが、非常に大事になってきている。ですから、あんまり派手なことをイメージするというよりは、本当に身近なところでの暮らしやすさを実感できるようなまちをどうやって作っていくか…そういう時代になってきているということだと思います。

もう一つは、やはり、これまでの高度成長期に比べて大きく違うのは、人々の価値観というものが非常に多様化してきている。自分らしく暮らしたいとか、自分らしい生き方をしたいとかということが非常に大事になってくるわけですし、それまでは、どちらかというとこれまでのまちづくりというのは、非常に平均的なものを、例えば行政側から見ると、皆さんに提供していけば、皆さんが大体満足するというような時代だったかと思います。それに対して、これから、生活の質というようなことを目標にする時代になってくると、それは必ずしも平均的なものを常に作り上げていけば良いというよりは、皆さんが選べるということが非常に大事になってきます。それは、暮らしの中で色んな場面があるかと思えます。それは、人々のライフスタイルというようなもの、生活の仕方というものでも色々な選択

というものが認められる。その多様性が認められる時代になる。そのためには、皆さんの色々なライフスタイルを実現していくためにも、色々な環境とかそういうものが選択できるということが非常に大事になってくると思います。

あとは、もう一つ言うと、これは、先程、老若男女と書いてありますけど、少子高齢化が進んでいったりしますと、やはり、そこに経済的な格差ではないんですけども、様々なサービスとか生活に関わる色々な利便性のものに対する人々がアクセスしたり、それを享受できる機会というものが、実は差が出てくるということがあります。

それをどういうふうにしたら良いか？今日は多少こだわってお話させていただくことがあると思いますが、それは、もう車社会に端的に現れておりまして、やはり少子高齢化が進むということはどうですか、いわゆる交通弱者といわれる人たちが増えるということにもなります。それは、これまでの車社会、ある程度若い世代というか、高齢化が進む前ですと、それぞれが車を運転して自分が好きな所へ、自分が好きな時にそこへ行けるというようなことがあったわけですけど、少子高齢化が進むってことは、一つには、そういった交通弱者といわれるような人達が、増えてくるということにもなるわけですし、その人達にとってみると、自分の移動一つとってみても、自分の意思というよりは、誰かに送り迎えしてもらわねばいけない、それ自体は必要な場面はあると思いますが、自分の意思で異動できない状況も生まれてくるわけですし、それから交通弱者と言われて人達というのは、高齢者だけではなくて、若い時分で免許を持たない人達、そういう人達は、すべてそこに含まれるわけで、その数が飛躍的に増えているということもあります。これは、そういう意味でいくと非常に結果としてですけど、色々なものに対してアクセスがしにくいということにもなるわけでありませぬ。

あとですね、それから、実は、そこから話をしてしまうと、ちょっとまずいかもしれないんですけど、車社会が進んだことによって、非常に人の交流機会が減っているということが現実にはあります。それは人々が、ドア・ツー・ドアでとにかく移動するわけですから、結局、街の中でも人と接触する機会というものが極端に減っているという現実があります。ですから、それだけを言っているわけじゃないんですけども、これからの時代、生活の質を豊かにしていくということと言うと、色々な人々との出会いを生むような多様な交流機会というものをどうやって街の中に提供していくか？これは生活の質を豊かにしていく上でも不可欠な要素ではないかというふうに思っています。

実は、私は、そういう交流機会といったものによって実現している私どもの生活の部分を「パブリック・ライフ」という言い方をしてるんですけども、「プライベート・ライフ」に対して、私的な、家族とか個人的なプライベートな生活に対して、「パブリック・ライフ」と言ってみて、要は色々な人達と接触する機会、触れ合う機会をどういうふうにして街の中に作り出していか？それは、ここにも書いてありますが、地域資源を活かした特徴ある公共空間とか、公共空間という「そと」…外部のスペースのように、公園とか広場のようなものに捉えるかもしれませんが、こういったお話をさせていただいているカノラホールなんかにもそういう部分に含まれると思うのですが、そういった場所をどうして作り出していかって事が、非常に大事にもなってくる。それが、まちづくりの意義にも繋がってくるだろうと思います。

もう一つは、地域経済の活性化ということがあります。(パワーポイント\_スライド No.11)これも非常に悩ましい話で、今日、このことだけを、私が軽々に話をできないということもありますけれど、やはり、色々考えていった時に、経済のあり方抜きに生活の質という話はできないだろうというふうを考えていて、もちろん、これまで通りの経済・産業といったものも、大事にしていかなければならないということはあるんですけど、これからの時代として、具体的なことはなかなか申し上げられないところがありますけれど、地域の資源、これは物理的な資源というのがありますし、人的資源とか、あるいは技術とか、そういうものも含めてですけれども、そういったものを生かした内発型の産業の育成というようなことは不可欠になっているだろうと思いますし、それと同時に、それを育成するためにも、新しい起業環境、何か新しいことを始める、そういうことがしやすい場所、ある意味でチャレンジできるような環境が、街の中に整っているかどうかということがあるというふうを考えています。特に商業地では、分かりやすいことなのですけれども、街の賑わい促進、どちらかというと商業地を活性化させるためには、単に商売をなんとか上手くやれば良いというふうを考えていますけれども、実は、街の中心の商業と郊外の商業の大きな違いは、どちらかというと、専門家に言わせると、郊外はスペース・インダストリー、空間の産業であって、街の中の商業というのは、ヒューマン・インダストリーだというふうに言っていますけれども、その違いが明らかにあるわけでございまして、要は、常に街中の商業というのは、人を介しての商売になってくるわけで、それは別の見方をすると、物の交換・やりとりを通して、人の色んなコミュニケーションが発生しているというのが街であったりするわけで、これは決定的に郊外の商業とは違ってくる。極端なことをいうと、郊外の商業施設というのは、合理的、効率といったものをとことん追求している商業ですので、場合によっては、ほとんど人が居ない店舗といったものも考えられるわけで、究極の形としては、そういうことでいうと、街の中心の商業と郊外の商業というのは、基本的には質的に違うものである。それは、どちらが良いというのではなくて、ある程度、選べる状況に持っていかなければならないだろうというのが強く感じるところであります。

あとはですね、街というのは、基本的に楽しくなければいけないんじゃないかな？てなことを感じています。それは、街の中で、人々が普段体験できないような非日常的…すみません、非日常性の「性」の字が間違っていますね。すみません…そういった日常性から得られるような楽しさというようなもの、ある意味では、発見があつたりというようなこと、大げさなことを言うとあれですけども、日常的にはそういうことですね。とにかく、楽しくなければいけないんじゃないかということです。

あとは、わかりやすく言うと、ハードの整備だけじゃなくて、もう少しソフトの、サービスなどを含めたものをしっかりと考える必要があるんじゃないかなということでもあります。

ちょっと一つ一つ取り上げると、なかなか時間が足りなくなってしまうので、もう一つのまちづくりの意義というのは、最終的には地域力の向上というようなものに繋がっていくものだろうと思います。(パワーポイント\_スライド No.12)地域の価値というのが、皆さんの力によって生み出されて、それが、そこに生活する人達に共有されていく、そんな場所というのは、結果的に文化に敏感な人達、あるいは、企業というものを惹きつける場所になってくる。この辺もいきなりそういう話をしても、ピンと来ないかもしれませんが、海外なんかの色んな事例を見ていると、やはり、まちづくりに成

功した所というのは、結果として、質の高い人達がそこに移り住んで来て、さらに、質の良い企業がそこに立地するということが現実には起きているということがございます。

それから、同じように、先程、生活のアメニティという言い方をしましたけれど、生活の快適性といったものがしっかりと保全されて作られている場所というのは、先程も申し上げたように良好な住環境を求めて、そこに色々な人達が来る、移り住んで来る。もちろん、当然、それは前提として、出て行かない、定住するということがもちろんあります。

それは、経済についても、ある程度経済が活性化されてくると、それ自体が新しい経済を誘引したりするということで、良い循環が始まる。これは、日本の現状の中で、なかなか良い事例が見出せないのですけれども、海外で見えていますと、そういう事例はかなりあります。そういったこともございます。

あとは、今日の最後の結論に近いところで申し上げることになると思いますが、やはり、これからの時代は、住民と自治体、市ですね、行政が協働して、ガバナンスという言葉がちょっとわかりにくいかもしれませんが、直接訳すと「統治」になっちゃうんですけども、ちょっとこの言葉はわかりにくいかもしれませんが。一緒に街を運営していく、そういうものが出来上がっている街というのは、やはり地域力を持っている街というふうになるのだらうと思います。

少しややこしい、ちょっと小難しい話だけをさせていただきましたが、事例を少し、今申し上げた地域力であるとか、そういったことが、比較的、総合的に上手くいった、このまちづくりの力というのは結構侮れないという、そういう事例として、国外…国内の事例が全く無いわけじゃないのですけれども、多くがまだ途上なので…少し海外の事例になってしまうのですけれども、私がよく知っている事例として、これはアメリカ西海岸のサンタモニカというところの街です。(パワーポイント\_スライド No.13)

この街というのはですね、今見ていただくと、非常に、街に、通りに緑があつて賑わいがあつてという状況です。これは、実は、私自身が撮った写真なんですけれども、1970年代中頃っていうのは、まさにアメリカが、今の日本の地方都市が抱えているような課題が、まさに多くの街が抱えていた時でありまして、これが街の中心の商業地ですけれども、まさにシャッター通りといわれるようなにかく汚い、治安が悪いと言われるような状況も含めて、そういう街が70年代から80年代近くまで、こういう状態がこの街は続いてきたんですが、(パワーポイント\_スライド No.14)実は、まちづくりによって、現在では、全く同じ街です、これは。(パワーポイント\_スライド No.15)これくらい変わっていて、夜遅くまでも、非常に安心して、アメリカの都市の中では珍しいのですけれども、本当に安心して、歩いて楽しめるような街ということになっている所はございます。(パワーポイント\_スライド No.16)これはそうですね。そこには、やはり大きくいうと、人が、それまでは単なる商業だけだったところに人が住み始めてますし、やはり、大型店ではない、どちらかという非常にこだわりの持った街が、だんだんそこに集積してきているというようなことがあります。それから、街が色々な意味で、先程申し上げたパブリック・ライフというものに満ち溢れている。カフェとか、外に、従来道路といわれている所にルールを作つてカフェが出たり、一部、屋外で気持ち良く食事を取ったりなんてことが出来る環境が作り出されている。(パワーポイント\_スライド No.17)それから、あとですね、街の中では、こう

いう右上なんかがそうなんですけれど、ちょっと楽器を演奏する人が居たりとか、こういうワゴンなどを出してちょっとした小さな商売をする人達が居たりとか、ただし、こういった活動は、実は見えない所で、まちづくりの組織みたいなものが出来上がって、そういうところが中心になって、こういうことをやってることがあります。(パワーポイント\_スライド No.18)これについては、後で時間があれば触れさせていただきたいと思いますし、そこには、地域に暮らす人達の価値観とかライフスタイルといったものが、その街にも表れているというところがあります。

下の2つの写真は何かというと、左側が街の中の清掃をしている、ゴミを回収したりしている車です。右側はシャトルバスといって、サンタモニカは意外と近くに高齢者が住んでいる住宅地があって、その間を循環しているバスでありまして、いずれも電気自動車だということがございます。それは、まさに環境というものに対する意識の表れであるのと、あと右側のシャトルバスは、ワンコイン、25セントですから、日本円では 20 円位で乗れるバスですね。こんなようなものが、ちゃんと街の中には、移動手段として、こういうものが導入されて、車だけじゃなくて、高齢者の方たちが自分の意思で移動できる環境が作り出されているということがあります。

それから、街の中の話ですけれども、私も、実は、結構好きで、アメリカに行ったりする時に、好きでというか、逆に向こうで、泊まらなければいけない時に、どちらかという街が楽しい所で、特に一人で行っても、意外とちゃんと街を楽しめるような所ということで、泊まったりする。何より、楽しみはですね、やはり夜遅くまで、それこそ週末ですと12時くらいまで、本屋さんが開いていたりとか、そこにカフェがあったりとかという環境がある。(パワーポイント\_スライド No.19)これは、先程言った色々な意味での交流機会ということでもありますし、必ずしも、これは日本でいうと、夜の賑わいがある所という、大体、飲み屋ばかりだったりとか、そういう所になっちゃうんですけれども、必ずしもそうでない。もちろん、食事をしたりする場所も沢山ありますし、あとですね、この街のことを詳しく話していると時間が過ぎちゃいますけれども、とにかく映画館が沢山あるんです。皆、やはりアメリカでは、結構、映画が人気があるものですから、食事をした後、皆、夜、映画を観に来るとかですね、そういう場所になっている。要は、私もちょっと今日は、敢えてご紹介したのは、やはり街の中心というのは、まちづくりを考えていく上で象徴的な場所でもあるわけですし、そういう場所がどういう場所になったら良いかなということを考える必要があって、ただ、なんとなく商店街という、そこにお店があって、ただ必要な物を買に行く場所だと考えがちですけれども、恐らく商業、商店街それ自体も、段々、役割が変わってきているわけですし、もう少しいつと、私自身、結論めいたことを言ってしまうと、街の中心というのは、商業も含めてですけれども、そこに生活する、街に生活する、暮らしを支える色々な生活支援の機能というものが、そこにあるということが非常に大事ではないかと。それは、人の交流の場所でもあったり、そういうことだろうというふうに思っているところでもあります。こういう街もあります。ちょっとすいません、スライドが一つ余分に入っちゃってます。(パワーポイント\_スライド No.20)

そういう意味で、もう一度、まちづくりの背景みたいなものを少し総括いたしますと、私なりに総括しますと、こんなことになるのかなと思っています。

やはり、先程言ったまちづくりの方向としては、少子高齢化ですとか、交流人口の増加ですとか、

こういうことを前提として色々考えていく必要があるということと、環境の問題があります。それから、経済の問題。

それから、先程ちょっと、実は、そのことは触れていないのですけれども、一つは、まちづくりというのは、基盤整備型のまちづくりからの脱却ということも非常に大事ではないかと。というのは何かというと、どちらかというと、これまでのまちづくりというのは、道路を造れば良いとか、そういうところが非常に大きかったと思いますし、非常に象徴的な取り組みだったというふうに思いますけれども、そこから、そろそろ脱却する必要があるのかなというふうに思っています。

それかた、もう一つ、まちづくりの課題と整理しましたけれど、これまで、まちづくりと言っているのですけれども、ちょっとあまり馴染みの無い言葉ですけれど、敢えて「まちづかい」というようなことを考えていかなければいけない。(パワーポイント\_スライド No.21)やはり、街を造るということは色々やってくるわけですから、どうやって街を使うか？というところで、もう少し知恵を出す必要があるんじゃないかということと、やはり、街というのは、使って意味があるわけですから、そこをどうやって使うかということ、その使い方も含めて、皆さんが考えていかないと、自分達の街は、そうしないとなかなか良くなならないだろうということですね。

あとは、人並み主義からの脱却というのは、基盤整備型のまちづくりと共通しているのですけれども、どちらかというと、特に日本人は、平均的なものに非常にこだわりがあって、皆同じように同じ物を手に入れてところがあるのですけれども、やはり、人並み主義というところから脱却して、例えば、同じ都市であっても、他所の都市とただひたすら比較して、何が多いか少ないかと言うのではなくて、岡谷固有の特性とかいうものを見極めて、その個別的な解というものを選択していかなくてはいけないんじゃないかと思います。

それから、先程、基盤整備と言ったのは、あくまでも私が言ったのは、道路とか、そういうものと言っていたのですが、そうじゃなくて、これから大事なものは、活力のあるコミュニティを支える、あえてここでは私は「コミュニティ・インフラ」と言っているのですけれど、生活支援を支える基盤的な施設であるとかサービスというものをどうやって充実していくかということが非常に大事になってくるだろうと思っています。

それから、もう一つは、どちらかというと大都市に多く適用できることなのですから、これまで右肩上がりの社会の時代には、経済活動としての都市開発、それは簡単に言えば、これを造ることによって床がいくらで売れて、いくら儲かるという話。それから、住宅でもそうですね。資産価値がどうだというようなことで…。そういうことで、自分の持っている不動産がどれだけ上がったかということで、一喜一憂している。ある意味では、どちらかというと都市開発の大きな、中心になっている都市開発を動かしている理念、考え方だった。それを、あえて経済活動としての都市開発と言っていますけれども、もちろん経済的に成り立たない都市開発は成立しませんけれども、そうじゃなくて、これからは、本来、まちづくりとしての都市開発を考えていかなければならないということがあります。

もう一つは、地区環境のサステナビリティ。サステナビリティという言葉は、新聞など色んなところに登場していますけれど、持続可能性とか、そういう言葉になって、特に環境問題に対して多く使われている言葉ですけれども、私自身は、この持続可能性というのは、もちろん環境問題に対し

ての持続可能性というのは非常に大事な問題であると思いますけれども、それは他にも、経済の持続可能性というのも一つあると思いますし、もう一つは、社会、地域社会そのものの持続可能性というのも、これから考えていく必要があるということを感じています。

あと、ちょっと付け足しのようにもなっているかもしれませんが、昨年の3・11を見ればわかるように、岡谷でも、かなりそういった災害というようなものを経験しているということでもあります。それから考えますと、安心・安全というのは、ある意味で街の基盤になるものだろうと思います。ここを、やはり実現していかなければならないということがあると思います。

ちょっと、ここから少し色々な事例をご紹介しながら、急ぎますけれども、じゃあ、街の価値観というようなこと、裏返せば、街をどういうふう to 評価するかということでもあるのですけれども、街の評価とか、価値観というのは、先程も申し上げましたように、例えば、わかりやすくいうと、30年前と今を比べてみれば、大体おわかりになると思いますけれども、実は、そこに暮らしている同じ人であっても、自然と暮らしの価値観というものが変わってきているということに気づかれるのだろうと思います。(パワーポイント\_スライド No.22)

ただ、そういうことでいうと、価値観というのは、非常に変化するものだという前提に立つと、街の評価というものも実は時代時代に評価というものがあると考えていただいよと思います。ただ、街の価値というのは、どこか全然知らないところにそれを評価したりする人が居るのではなくて、そこに生活している人達が自ら選ぶということが非常に大事である。それが先程言った、平準化とか人並み主義からの脱却ということでもあるわけですが、やはり、優先順位を付けて選ぶということが非常に大事だということがあります。その先には、都市の魅力とか、都市の個性というようなものがあるわけですし、そういうものを一つの都市を評価するところのポイントとして考えていく必要があるのだろうと思います。その時に、大きくは、風土性、その土地が持っている固有の自然条件であったり、ある意味では、色んなことを考える時のベースになっているものですね。

それから、歴史性。これは、もう過去から現在、そして未来に繋がっていく時間の中で捉えられるその街の中で持っているある意味みたいなものがあると思います。それをどういうふう to 評価するか？

あとは、人間性という言葉を書いていますけれども、これはどちらかというと、その生活というもの。それは、経済みたいなものを含めて全てを含む意味で人間活動の全体ですね。そういうものをどういうふう to 評価していくかということだろうと思っています。

ここから少しでもできるだけ具体的な話をさせていただこうと思いますけれども、岡谷市をこれから素敵な街としていくために何を考えたら良いのかなということ、私自身、ここに書いてありますように「地域個性を活かすまちづくりの10の戦略」というふう to 書いてありますけれども、それを少し事例をご紹介しながら、お話をさせていただこうと思います。(パワーポイント\_スライド No.23)

まず、「街の成り立ちを考えること」。(パワーポイント\_スライド No.24)これは、当たり前のことなんですけれども、改めて、逆にここに暮らし続けていると、その持っている価値というのは、実はなかなか気が付いていないということがありまして、やはり、私のようにちょっと地域を離れてみると、改めてその地域のここが違うのだとか、ここが特長だということが見えてきます。外から来た人が、すぐ気が

付くことでも、実は地元に住るとなかなかそこには気が付いていない。色んな街のお手伝いをして感じていることですが、改めて、街の成り立ちというものを考えてみるということが必要であろうと思います。それは、ここにありますように、歴史、地形というようなこととか、その上に展開された色んな人々の営みですとかです。歴史の中にどういうものがあつたかと考えていくと、その中に色んな手がかりあるだろう。やはり、まちづくりの一番ベースになる部分は、その辺りだろうと思っています。

そういう中で、具体的にそれをどういふふうに展開していくかということになりますと、地域資源をどうやって活かすのかというようなことがあります。

これは、いくつか日本のまちづくりの中でよく取り上げられる代表的な例だったりしますが、滋賀県の長浜には、黒壁というような当時は銀行として使われていた建物を中心市街地が衰退する中で、それを手放すというようなところから、その建物をどうやって使おうかということから話を若手の人達が議論して、それがどんどん広がって行って、街の中心の活性化に繋がっていった。(パワーポイント\_スライド No.25)この一つの事例を細かく話をする機会はちょっと時間がありませんけれど、そういったことがありますし、あと、金沢の市民芸術村というのがありますけれど、金沢は意外と知られてないのですけれど、こういった紡績工場があつた。(パワーポイント\_スライド No.26)こういった紡績工場を実は市民と一緒に関わる形で、これを改修して、そこに色んな意味での演劇とか舞台とか音楽の、こういった市民の創造的な活動の場を作り替えた。なおかつ、この施設の運営は、市民がかなり深く参画して、24時間使えるような施設になっている。行政だけの運営だと、なかなかそうはいかないというんですけど、そういった施設づくりがされています。(パワーポイント\_スライド No.27)

これは、少子高齢化、色んな所で学校が閉校になったりとか、統合されたりというようなことがあつて、その学校をどういふふう利用するかというのは、色んな都市の大きなテーマになっていたりします。それは、いくつか色々事例がございますけれど、そういう中で神戸なんかは、こういったものを新しく「北野工房のまち」というようなことで、ここではちょっと商業施設を入れたりしていますが、それ以外にも色んなアーティストの工房にしたり、芸術家のものづくりの場所にしたり、あるいはコミュニティ施設というようなものに利用していくというようなことが起きていますし、そういう意味では、地域の資源を、都市が変化していくと、それまで使っていた施設がその活動としては必要なくなってくるということは、結構、色んな所で起きてきます。そういうものをどうするか？(パワーポイント\_スライド No.28)

これは無くなった年を数えてもしょうがないのですけれど、岡谷も随分産業遺産があつたわけですが、実際にそういったものをちょっとしたタイミングの差で、それを残した所、残さなかつた所があつたりします。そういう意味で、岡谷も、まだ、一部には少しは残っていると思いますので、そういったものをどうやって活かしていくかということにも一つの手がかりがあると思います。これは同じように函館ですけれど、函館も海辺の倉庫みたいなものを利用して、こういうギャラリーにしたり、レストランにしたり。(パワーポイント\_スライド No.29)これはもう海外では、当たり前ですが、最近、日本でも随分定着している動きでありまして、やはり、こういったものを上手に利用することによって、建物自体も再生されますし、やはり、地域固有の商業とか、そういう活動もこういう所から生

まれるということが現実にはあります。

あと、身近な所でいいますと、小布施なども、いろんな意味で歴史を利用しながら、どちらかというと、最初は、民間が主導で色んなまちづくりを進めています。(パワーポイント\_スライド No.30)そういう中で、こういった小布施のまちづくりは、全国的に知られるようになった。こういった街並みも含めてですけれども、個性的なつくりというのが、小布施自体がそんなに大きな街ではありませんけれども、こういうことも実現しています。

これは、私自身が関わった、実際に設計などもしたりしているのですが、静岡県の島田という所の、街のまさに中心市街地ですけれども、ここは、街の中心を区画整理というのをやっています、その時に街のメインストリートの一つを完全に歩行者主体の道づくりにすると。(パワーポイント\_スライド No.31)同時に、両側の建物というのは、実は、私が設計しているわけではないのですが、色々ルールづくりをして。ここも元々、東海道の宿場があった所でもありますので、そういった歴史、それから、そこにお祭りが、まだ色々あったりというようなことで、そういう街をどうやって再生するかということで。ただ、映画のセットを作るような街にしてもしょうがないだろうということで、少しでも、そういう雰囲気を感じられるような街にするというようなことでやったものでありまして、これは、実は、今の国土交通省が全国公募したアイデアに応募して、たまたま私どものアイデアが選ばれて、このお手伝いをした…そういうケースでもあります。とにかく、街の中に、私どものコンセプトとしては、もう一度、人が集まれる場所を作り出せないかということを中心にしてやりました。(パワーポイント\_スライド No.32)ですから、これは道なんですけれども、「道の広場」。それから、もうちょっとという「生活のショーケース」といって、そこに来るとこの街の人達の豊かな…豊かなといったら、ちょっとアレですけど、こだわりとか生き方、生活の価値観みたいなものが感じられるような、そんな街の舞台を作れないかということ考えたということです。これも色々市民の人達と色々議論をしてやったものです。こう一部に広場を作ったり、広場が全部木でできてまして、これは、この地元に木材の産業があるということで、こういったものも、できたら活かさないかというようなことを言われて、こういうことをやったわけですが、木の広場ですね。(パワーポイント\_スライド No.33)

あとは、水と緑を活かすこと。(パワーポイント\_スライド No.34)これは、たぶん、岡谷の場合は、不可欠なことではないかなと思っています。単純なことをいえば、色んな自然との接触機会がある。これ自体が、非常に生活の中でも生活を豊かにする部分であって、大都市に生活している人間からすれば、それはもう本当に羨ましい「地方の価値」でもあるわけです。そんなことを色々考えていく必要があるだろうということです。これは、海外にもそういったことを実現した所があります。これは、河川なのですけれども、アメリカで最も住みたい街ということで、常にランキングのトップにある街、オレゴン州のポートランドという所がありますけれども、ここは地方都市です。河を使った舟運といわれる「河の港町」として発展した所ですけれども、元々は、水辺というのは、工場とかそういう物しかなかった所が、今では、どんな人でも水辺にアクセスできる、近寄って水辺を楽しむことができる街、その代わり、水辺は公共のものにしようということで、車は逆にあまり入れない造りで、水辺に皆が親しめるような、そんな水辺を作っていたりします。(パワーポイント\_スライド No.35)

あと、色んな水があるわけですし、これは山形県の金山。(パワーポイント\_スライド No.36)金山と

というのは、まちづくりを非常に頑張った。どちらかという過疎地といって良いような所で、鉄道も無いような街ですけども、我が国の色々なまちづくりの最近でも事例の一つとして取り上げられている。どちらかというと林業が主体の街なんですけれども、そういった林業を再生することとまちづくりを併せて行うというようなこともやっていますし、元々あった生活用水だったりしたような水を積極的に活かしたりというようなことをやっています。

あと、歴史的なことということでいうと、水郷という良いと思いますけど、佐原というような所は、歴史的な街もそうですけれども、やはり、こういった水というものを積極的にまちづくりに活かしている。(パワーポイント\_スライド No.37) ちょっと個人的には作り過ぎちゃってるかなというところがなくはないのですが、そういうこと取組がある程度実を結びつつある所だと思います。同じように、滋賀県の近江八幡とかですね、こういった所も水を手掛かりに、もちろん、当然、水というのはそれまでの過去の歴史を遡っていった時に、生活と水というのは、切っても切れない存在であったわけですから、単に水を切り離すのではなくて、そういう所と関連づけて、生活の中にある水というようなことを意識して、八幡堀というのを再生している事例であります。(パワーポイント\_スライド No.38)

あと、ちょっと飛びますが、世田谷の用賀という所にある住宅地ですね。(パワーポイント\_スライド No.39) 住宅地の中に後から作った水なんです。用賀プロムナードという、要は、住宅地の中にあまり車を通さない道を作る時にこういう水路も併せて作ったというケースですけど、ただ、警察には非常に不評だったようでして、地元の人達とか非常に喜んでいますが、とにかく車が入れなくなってしまったということで、非常に車が好きな警察は、どちらかという非常にこういうものに対しては評価が低いというところが、私の経験からいってもあります。警察の方が居たらごめんなさいと言うしかないのですけれども。

あと、先程申し上げた「パブリック・ライフのあるパブリック・スペースをつくること」。(パワーポイント\_スライド No.40) ちょっとカタカナばかりで、ちょっと書き直しておりますけれども、多様な交流機会を創出する公共空間。公共空間というのは広場とか道路だけではなく、こういう施設も含んでというふうに考えていただければと思います。(パワーポイント\_スライド No.41) やはり、そういう街がある、そういう場所があるということは、文化というのは必ずしも自然にそこから作り出されるわけじゃなくて、そういう人の交流する場というのがあってはじめて地域固有の文化というものが生まれてくると思っています。そういう意味では、そういう場所をどうやって作り出すかということが非常に大事なことでして、それは街の中のいわゆるハードな仕掛けとしても、これはちょっと大都市の絵になっていますけれども、東京辺りでも、昔はこういう場所が全然無かったのが、最近では、こういう場所が非常に上手に、地価の高い東京でも、そういうことが非常に大事だということで、そういう場所を街の中に作り出すということを積極的にやっております。これもそういう一つですね。あとは、こういう街角の広場とかですね、こういうちょっと人々が気楽に滞留できたり、溜まったりできるような場所というのは、必ずしも公共施設、公共が管理する場所じゃなくても、民間の敷地の中にそういう場所を作り出すということも結構で、例えば、長野市辺りでも、少しそういうような街がちょっと一部ですけども出来て、そこは非常に街の人にとってみても居心地の良い場所が出来たりというようなことが実際に実現しています。(パワーポイント\_スライド No.42)

あとは、街の中でも大きな通りだけじゃなくて、どちらかというと車が入って来難いようなこういう路地とか、こういったものの賑わいをどうやって作り出すか？(パワーポイント\_スライド No.42)これは、我が国の色んな街、魅力のある街とかに共通しているところでもありますし、海外の都市に行っても、やはりこういう場所があるかどうかということは、街が居心地か良いか、豊かであるかということを実感する場所でもあります。こういうことが非常に大事です。これは、先程言った民間の敷地の中の中庭。(パワーポイント\_スライド No.44)ちょっと人があまり居ないので、あまり良い事例とは言えないのですけれども、こういう場所に、常に人が居るような場所というのを街の中にどう作れるかということも非常に大事になってくると思います。

あとは、そういう意味でいうと、実際、日本でもまちづくりの中でそういう意識が少しずつ高まってきました、色々な所で社会実験というような形で色々な試みがされています。これは、千葉の例ですけれども、そうやって街の中に、どちらかというと道路なんかは、現在、日本の法律でいうと、道路を勝手にこういう場所に使うわけにはいかないというのはありますけれども、社会実験と称して、そういう場所がどういう意味があるかというようなことを試みているということは、色々やられています。(パワーポイント\_スライド No.45)これは広島です。(パワーポイント\_スライド No.46)これは横浜市です。(パワーポイント\_スライド No.47)ちょっと大都市が多いので申し訳ないのですけれども、こういう動きがあるということですね、ちょっと知っていただければと思います。

あと、もう一つは、やはり私自身、こぞずっと、こだわっていることであるのですけれども、やはり楽しく歩ける街にしないことには、どうしようもないんじゃないかということを感じています。(パワーポイント\_スライド No.48)そのためには、もちろん車というのは頭から否定する訳じゃなくて、車に代わるもう一つちゃんと選択ができる状況というのは、ちゃんと作っておかなければならない。全部、車に置き換わってしまって、道の主役というのが車だけであるという状況というのは悲惨でありまして、やはり、道は、本来、主役は人だというふうにして、さらにどうやって車の利便性を上手くそこに生み出していくかということも非常に大事になってくる。その中で、私自身思うのは、歩行者と車、ここで言っている車というのは自家用車という意味ですけれども、その中間の移動手段というのをどうやって街の中に豊かにしていくか？これもやはり、先程お話した選択性の問題として非常に大事である。一つは、都会では、かなり見直されていますけれども、自転車なんてのも、その一つになります。ヨーロッパに行くと本当にこれでもかというくらい自転車が、街の主役になってきています、移動手段に。そのために自転車の利用の仕方とか、なかなか大都市と地方都市では自転車の使い方、導入する仕方というのが、ちょっと工夫が必要だろうと思いますけれど、我が国でも少しずつそういう動きが出てきています。

あと、もう一つは、やはり公共交通ですね。我々が、どうしても公共交通と一般にいうと、大量輸送型の公共交通だけをイメージしますが、そうじゃないもう少し少量で、小さな数をどれだけ柔軟に人を動かすことができるかという交通手段というものをもう少し考えていかなければいけない。例えば、タクシーとバスの間ぐらいのものを考えると、もちろん今でもコミュニティバスみたいなものが、色々な都市で定着していますけれども、まだ足りないだろうと思っています。これは、歩くということを考えると同時に、その部分を簡単にいうと交通弱者をいかに少なくするかということでも

あるわけですし、そうすると、当然、交通弱者と言われる人達は歩いて動ける街に、みんな人は来ます。そこで色々な用が足せば良いわけですから、そういう場所をどうやって街の中に作り出していかということも非常に大事になってくると思います。

色々な動きがありますけれども、通りをできるだけシャット、これは全国的にも色々な例が見られますけれども、ショッピングモールとあって、どちらかというところじゃなく人を主役にした道づくりというようなことを色々やっている所があります。これは横浜の例ですね。(パワーポイント\_スライド No.50) 元町という商店街。ちょっと今はデザインが変わっていますが、こういう感じですね。(パワーポイント\_スライド No.51) こんなようなことをやっていますし、これは先程ちょっとご紹介した静岡県の私が設計した「おび通り」という所ですけども、さっきはちょっと人が居ましたけれども、人が居ない時に撮った写真で、ちょっとあれですけども、こういうどちらかというところ公園のような道を作ろうということをやったものです。(パワーポイント\_スライド No.52、53、54)

あと、そういったような動きというのは、他にも色々ありまして、こういう通りを一つ工夫することで、どちらかというところハードですけども、こういうことも可能である。それから、ハードに関連したことで、やはり街のデザインというところとすごく目立つものを作るというイメージを持つ人もいるかもしれないんですけど、そうじゃなくて、街のデザインの質を高めるということは非常に大事なことで、わかりやすいえば、街並みであったりということになると思います。(パワーポイント\_スライド No.55) そのためには、色々海外でも色々な街並みを作り出すための工夫をして、それをルールにしたりというようなことをしています。そのルールの中にも、建物の低層階はできるだけ賑わいを生み出すものにしていこうというような、例えば、最近の街の中はですね、商業ではなかなか1階部分が埋まらなくて、特にマンションなんかの場合は、足元がいきなり住宅の施設になっちゃうというようなことも結構多くて、それが結局街並みの連続性なんかを完全に分断しちゃうというような結果になっていたり、賑わいがそこに全然生まれにくいというようなことが起きています。こういったことも色々工夫することで治ってきますし、よりそれを積極的に利用すると道と街路の間をどうやって使っていくかというようなことは、特にヨーロッパの街なんかに行くと、なんでヨーロッパの街は楽しいんだろう、歩いていて楽しいんだろうというふうに感じるんですけども、そういう工夫が非常にされているし、また、規則的にもそういうことが上手く実現するようなことになっているということがございます。(パワーポイント\_スライド No.56、57、58)

あとは、つまらないことかもしれないですけども、こういうサイン一つとっても、広告物一つ見ても、我が国の場合は、どちらかというところ車社会を前提として、車でスピード出して走っている人達にも目立って目に付くものを作ろうなんていうことが基本ですので、結果としてああいうとにかく大きな看板、派手な看板を付ければ良いというようなことになってしまっていて、街自体を大きく、はっきりいうと美しくない街にしちゃってるということがあってと思います。(パワーポイント\_スライド No.59) ですから、これは別に車だけを目の仇にしているわけじゃないですけども、結局それも、車社会が進むことによって、ああいう広告とか看板の類も大きく変化したっていうのが現実にはあります。

あとは、そういう中で、地域の資源をデザインといった時にもあります。ちょっと特殊な例かもしれませんが、愛知県の高浜なんて所は燻瓦の産地だったりするんですけども、そういうものを

街のデザインというか中に少しでも取り入れると。(パワーポイント\_スライド No.60)一つ一つのデザインが良いかどうかは、ちょっと別ですけども、そういう発想があるということです。

あと、先程ちょっとご紹介した金山という所は、木材の産地だったりするということもあって「金山住宅」という独自の地元産の木材を使った寒冷地用の住宅というのを一つモデル的に考えまして、一つ一つを個別に全部建築家が設計しているわけではないんですけども、そういういくつかの雛形をベースに地元の工務店の人達が積極的にそういうものを作っていこうと。(パワーポイント\_スライド No.61)何年かけて住宅を作っていく中で、街全体が自然に「金山住宅」というものの雰囲気街が作りあげられてくるというようなことが、結果として実現してたりします。

あとは、6番目。多世代が安心して暮らせる街にすることというのがありますが、これは先程いった安心して暮らせるということと多世代、これはやはり多様な生活というものを実現するような環境を作りだしていかなくちゃいけない。(パワーポイント\_スライド No.62)一つの決まりきった、住宅でもそうだと思いますけれども、日本人はどちらかというと住宅に対してのイメージが非常に貧困なのか、非常に決まりきった、逆にいえば、与えられたものくらいにしか考えていないところがあると思いますね。

マンションといたらこういう形がマンションだというふうに思っていますし、戸建とマンションしかないというふうに、それくらいの選択肢しかないのが現実だと思います。そういう意味でも、色んなものが選択できるということが大事だと思いますし、ちょっと色んなものが出てきちゃうんですけども、街の中には暮らしを支えるという意味では、色んな機能がある、商業施設だけじゃないということがあります。これは都市が中心ですけども、今の色んなライフスタイルとかに関連して、色んな新しいものが出てきているというのが現実です。(パワーポイント\_スライド No.63、64)

あと、住宅についても、色んなタイプの、住まい方にしても、高齢者のグループホームなんてのも非常に段々と色んな所に事例が出てきていますし、最近では、ちょっと言葉で書いてありませんけれど「シェアハウス」とかですね…若い人達が建物を共同で使うような住宅タイプとか…そういうものが色々出てきています。(パワーポイント\_スライド No.65)そういう意味で、地方だからこれしかできないということではなくて、もう少し選択肢を増やしていくということが、やはり地方都市でも色んな生活のスタイルを可能にする一つの手掛かりにもなるだろうと思います。

やはり、高齢者についても、高齢者一つとってみても決まりきった老人ホームとかそういうものだけじゃない色々な暮らし方、高齢者でも…私もかなりそこに足を踏み込んでいるんですけども…やはり、そうじゃない暮らし方、例えば、それこそ高齢者が共助といいますか、お互いに助け合いながら生活する仕方ということも現実には行われきていますし、そういうことを選択できるということも大事だろうと思います。(パワーポイント\_スライド No.66)

同時に、これは先程ちょっとご紹介した滋賀県の黒壁のある所の街の例ですけども、街の中に高齢者が集まれるような場所、ここでは「プラチナプラザ～井戸端道場」なんて書いてありますが、長浜ですね、すみません。(パワーポイント\_スライド No.67)ここには、高齢者が自ら運営する高齢者が集まれるような場所があったりとかですね、それから右の方は、おかず工房とかリサイクルショップとか、逆にそういう地域の人達が自分達で直接そこに関わっていくような場所というのが街

の中にも作り出されているというのがあります。

あとは、先程申し上げたように、生活の質というものを大事にしていこうとすると、そこには生活の質を支えるようなそれまでなかった新しい機能というものが街の中に求められるようになりますし、これは、いわゆるコミュニティ支援機能という、スポーツクラブなんかも都会なんかにいればそうですし、色んなものがあると思います。(パワーポイント\_スライド No.68)それから、あとは子育て支援、少子化といえども子どもを育てるといのは非常に大事なことでして、ここにあるのはちょうど茅野市の駅前に、たまたま岡島が撤退した後に「0123広場」という施設ですけれども、親子…岡谷にもそういった施設があると思いますけれども…そういったものであるとか、とにかく色々ある。(パワーポイント\_スライド No.69)

あとは、街の作り方としても、逆に建物を建てる場合にも、少し色んなルールというものの見直しながら、考えていかなければいけない。(パワーポイント\_スライド No.70)色々建物の共同化とか、これは専門的な知識になるかもしれませんが、ある程度、街をどういう街に変えていくんだということのイメージをちゃんと持った上で、そういったものを少し街のルールにしていくというようなことも必要になってくると思います。

海外でも色々なそういう動きはあって、これは海外の住宅ですけれども、どちらかというと我が国は、今は、特に地方都市なんかの場合は、高層マンションをいきなりボーンと建てるなんてケースが増えてきていますけれども、私個人はどちらかというと、地方都市はそこまで高層というものを選択する必要はなくて、ある程度の密度を確保するのであれば、もう少し接地型というか低層でも密度を確保した中に人々の交流が生まれやすい住宅の作り方というのがあると思っています。(パワーポイント\_スライド No.71)そういうものをもう少し工夫していかなきゃ。地元にも専門家の方達がいると思いますので、是非、そういったことを地元の専門家の方達も頼まれるままにマンションをボーンと建ててしまうのではなくて、地域の暮らしというものを考えて、もう少し選択ができるようなものを考えていくということも必要なのかなというふうには感じております。これなんかも、まさにそうで、どちらかというと高層に対して、そういう選択が行われている例で、左上なんかは、わかりにくいかもしれませんが、下の方にお店が入っているんですね。その上に、真ん中の下の低層階には、外側にお店が張り付いているんですね。その上に蓋をかけて、上に住宅を乗っけて、そこが住宅で生活する人達の共用のスペースにもなったりしているというケースでもあります。どちらかというと、ちょっと都市型ではありますけれど、いずれにしても、そういう住む、住宅についても、もう少し選択肢というものがあって良いだろうと思いますし、これは先程ちょっとご紹介したアメリカのポートランドという所ですけれども、街の中に街中居住というのが非常に上手く実現してまして、そうすると高齢者なんかも街の中に沢山住むようになってきているわけですね。そうすると、色々な意味で、街の中に人の色々な活動が新しく生まれてくる。その中には、当然、ユニバーサルデザインといって誰でも安心して暮らせるような環境づくりというのを実現しているわけですが、街の中にある、街の中心に、ちょっとした公園に皆が集まってきている光景ですね。こういうものが実現できる。(パワーポイント\_スライド No.72)

あと、今度は、環境にやさしい暮らし。(パワーポイント\_スライド No.73)これは、今さら言うまでもないんですけど、そういうことをこれから益々考えていかなければいけないということになると思います。

そういう意味でいくと、これは、コロラド州のボールダーという所で、今、フィギュアスケートの選手権をやっているのが、そのすぐ隣のデンバーという所ですけども、どちらかという、私も信州に近いイメージが、このコロラド州にありまして、非常に自然が豊かなわけですね。このボールダーというのは、マラソンの選手の高地トレーニングなんかで有名な所ですけども、一方で非常に、結構寒い所です。(パワーポイント\_スライド No.74)冬も、ある意味では、この岡谷とか、この辺に比べると雪も多い所なんですけれども、実は、高齢者も含めてここに移り住みたいという人が、もの凄いや量がいて、それを実は、ボールダーはコントロールしているんですね。コントロールしているというのは、一度に入れちゃうと一気に色んな開発が進んじゃうんで、バランスを取りながら少しずつそういうことをやっていこう、住宅なんかも増やしていこうということでやっている所ですけども、やはり、そこには、なぜ人が来るかという、一つには環境ということを含めて非常に自然との接触機会があるというような豊かさあるということです。

他にも色々と環境というようなことを手がかりにしてまちづくりを行っている所はありますけれども、静岡県の三島なんて所は、ちょっとした川、源兵衛川(げんべえがわ)という川を中心に市民と企業と自治体と一緒にあって、まちづくりに取り組んでいる事例でもあります。(パワーポイント\_スライド No.75、76)非常に川自体がコミュニティの場所になっている。ちょっと今日の写真には、充分そこが表現されてませんが、一昨年、訪れると、そこに子ども達とかがいっぱいという河川になっている。もちろん、河川の種類にもよりますが、それは市民が、それまでドブ川のようになっていた河川をきれいにして、もう少しそこを、一度コンクリートの三面張りのような川になっていたのを、護岸にもう少し自然を加えるというようなことをしながらやってきた…そういう取り組みですね。

これは先程ちょっとご紹介したサンタモニカという所ですけども、やはりこういった環境というものを色んな生活の一部に色んな形で持ち込むということです。(パワーポイント\_スライド No.77)

あとは、単純にいうと緑化です。これもちょっと実は手前味噌ですけども、埼玉県の方で、私自身がちょっと関わって、この道を設計していますけれども、駐車場も含めて緑をどうやって緑化するかということも含めてやっているケースです。(パワーポイント\_スライド No.78、79)

あとは、先程から何度も言っていますように、暮らしを支える機能というのをどうやって揃えるかということが非常に大事で、特に歩いて行ける範囲にそういうものをどうやって作り出していくかということだろうと思います。(パワーポイント\_スライド No.80)

ちょっとこれは、色んなヒントでしかないのですが、どここの事例ということではないのですけれども、やはり個性のある専門店というのをどうやって街の中にもう一度実現していくかということだと思いますし、ライフスタイル支援型の店舗というもの…ちょっとこれは都会的なイメージがあってもいいですけども、郊外型の商業施設というのは、あまりそういうことを意識しているわけじゃなくて、やはり暮らしを少し提案するような店というもの、ライフスタイルはそういうもの。(パワーポイント\_スライド No.81、82、83)規模を問わず、最近、地方都市にそういう店がちょっとずつ出てきている。そういう

所というのは、確実に支援されるわけです。使っている。そういうところにこだわっていく人達が、確実にいるということも確かです。色々そういう、ちょっとザッと紹介しますが、やはり、こういうものが一つの手掛りになっていくということがあると思います。(パワーポイント\_スライド No.84~90)全てが岡谷でということではないのですが、色々そういうものというのは色々あって、確実に地方都市でも大都市でも、そういうところに人が集まっているというのは確かです。

やはり、それは生活のニーズですとか、生活のスタイルの中にそういうものの手掛かりが沢山あるということだろうと思います。これは、なかなか一般市民だけで、こういうことが実現するわけじゃないので、やはり商業者の方達も含めて、こういうことを考えていかなければいけない。それから、こういうものも非常に支援されているということがあります。

海外でも、これは全く同じような傾向でして、都市の課題というのは、抱えている課題というのは、先程申し上げたように、実は、その街固有の課題もありますけれども、意外と色々な所を見ていると世界中共通の問題を抱えているなというのがありまして、その中で、やはり、ある程度成功したり、成果を収めているものにも共通点があるということで、そういう意味でも、ちょっとこういうことをご紹介している次第です。非常にこういうものがあるということですね。

それから、あと、生活を支える機能ということであると、我が国の場合、意外と「街の中心が衰退しちゃって困った、困った」と言っている都市に限って、実は、病院を郊外に持って行っちゃったりとか、あるいは、庁舎を外に移したりとか、公共施設を外に持って行って、特に広い駐車場を取れる広い敷地を確保するためにということ、実は結構やっちゃっている。それは見ていると、結果として、また更に街の中心を空洞化させる大きなきっかけになっているということも確かです。

そういうことに対して、アメリカの中でも意外とまちづくりを成功させている事例の中でも、シアトルなんていう…皆さんは、シアトルという野球なんかで色々馴染みがあると思いますけれども、ここなんかは徹底してまして、街の中心に新しく美術館とか、そういうものも含めて劇場とか、全部そういうものを街の中心に持ってくる。歩いていける所に持ってくるというようなことをしています。(パワーポイント\_スライド No.91)

あと、もう一つは、起業を促す環境。(パワーポイント\_スライド No.92)これはなかなか難しいのですけれども、これまでの産業を守っていくということも大事ですけれども、これからの新しい時代の産業をどうやって作り出していか？大きい所をボンというのはなかなか大変なので、やはりそれをどうやって小さな所から育てていくかということも大事なわけですし、そのために若い人達を中心にチャレンジできる機会をどうやって作っていくかということも大事じゃないかなと思っています。

これも海外なんかは、非常にあって、SOHO 型オフィスなんて、非常に小さいスペースで、そこから色々な新しいことを始めていくというようなことをやっています。(パワーポイント\_スライド No.93)これは実は大都市ばかりじゃなくて、地方都市でそういうことが起きていたりということがありますので、特に産業のベースみたいなものがあるこの諏訪地域なんかの場合は、全くこれができないわけじゃない。色々な意味で通信技術とかが発達していますので、逆にいうと、ライフスタイルでいうと、生活の中で非常に自然に触れたりとか、そういう暮らしをやりながら、実際、仕事としてはこういう最先端のことをやるなんていうライフスタイルの選択というのは、海外ではかなり当たり前になっているわけ

でして、だから、そういう意味では選択肢としては、日本にはまだ無いと言って良いと思います。

ただ、何人かの私の知人が、蓼科辺りに実際の持ち家はこちらに持っていて、都会では借家で良いというようなことで週末は必ずこちらに来るなんていう生活をして…数は少ないですけど、そういう人間も居ます。そういうことも、少しずつですけども、増えてくるだろうと思いますし、諏訪地域の場合は、東京との距離も知れていますので、そういう意味でいくと、ちょっと大袈裟なことをいうと、そういう可能性すら持っている街だと考えていただいても良いんじゃないか。ただし、そのためにはそういう人達が来ても、そういう人達の生活の質というものを、逆に落とさず、逆に言えば、新しい生活の質というものをここで実現できる…そういう場でなければいけないということでもあると思います。そこは何かということを見極めるというか、それをどこまで意識できるかということも大事だろうと思います。いくつかそういう起業的なもの…こういったものもそうです、アーティストとか、そういう人達も、そういう場が与えられるということが非常に大事なことです。(パワーポイント\_スライド No.94)先程いった高齢者もそうですね。こういう場所が、そういう場所になっているということなんです。(パワーポイント\_スライド No.95)

最後に、非常に大事な部分として、やはり、何と言っても、まちづくりということで言いますと、やはり、人だろうというふうに思っています。(パワーポイント\_スライド No.96)ですから、そういう意味では、街を育てる人材とか組織とか、どうやって作り出していくか、育てていくかということが大事でして、逆に、一人一人の市民が何かやれるということもありますけれども、逆に、その市民の人達が、ある意味で自分の趣味とか関心を共有する人達が少しずつ集まって何か一つの活動をするということが、日常的になってくると、それはすごく街にとって大きな力となるのだろうというふうに思います。そういう場所をどういうふうに作り出すかということだろうと思います。

それには、色んな話があるのですが、先程ちょっとご紹介した事例として色々あるのですが、三島なんかの場合は、「グランドワーク三島」というようなものができて、まず、水路をどうするかという事に対する取り組み、これは市民と企業と行政が一緒になって取組んだ取り組みですけども、その延長で、色々、「花とホテルの里」とかですね、色んなことをやってみたりしていますし、岡谷にも恐らく似たような動きが既にあると聞いておりますので、そういうものをどうやってもう少し力にしていくことが非常に大事だろうということがあります。(パワーポイント\_スライド No.97)あとで時間があれば紹介しますが、まさにそれが最近言っているソーシャルキャピタル、社会関係資本なんていう難しいことを言っていますけれども、そういう社会資本というと、なんかどちらかという道とかそういうものだというふうに考えられますけれど、やはり、どちらかという人の力で、人の関係の持っている力というのは、これから街を大きく変えていくということであるとそれが非常に大事である。そういう意味でいうと、参加の機会がどれくらい街の中に作られているかということも非常に大事であるというふうに思います。そういう取り組みは、色んな手掛かりを作って、色んな所でやっているということがあります。その中には、清掃みたいなこともありますけれども、街のワークショップをやったりとか、街並みウォッチングをやったりとか、特にこれからの時代、次の世代を担う若い人、小さい人達をどうやってまちづくりの中に参加させていくか？というところとあれですけども、関わらせていくということが非常に大事でして、そういう意味では、こういう環境教育と

か景観教育、まちづくり教育と言っても良いのかもしれませんが、そういうものに学校なんかと一緒にあって関わっていくということも、子ども達も参加する機会を作っていくことが大事ですし、それを通して、実は、親が関心を持つというようなことも現実には起きています。(パワーポイント\_スライド No. 98、99、100)色々な形がありまして、そのためには、これは景観なんですけれども、仙台辺りでは、市民活動がわざわざ景観サポーター制度というのを作って、自分達の街を自ら評価して、評価したものを公開していくというようなことをやったりもしています。こんなこともあるということです。(パワーポイント\_スライド No. 101)

ちょっと時間が限られてきていますけれども、そこで私たちに何ができるか？ということになります。 (パワーポイント\_スライド No.102)やはり、分かりやすく言うと、まちづくりというのは行政がやるものだと思っている方が、やはり大多数だろうと思いますし、市民を集めて何かまちづくりの話しても、恐らくその場は行政に対する色んな注文を、あるいはクレームを言う場所になったりということになると思います。

でも、やはりこれからは、多分、それでは自分達が本当に欲しい街というのは、なかなかできないだろう。恐らく行政ができるのは、これまでそうだったように、非常に平均値的なものを、ある意味では満遍なく平準的に、どこにでも均等に提供するということは、行政のやり方としてはやれるだろうし、やると思いますけれども、それでは、恐らく、先程から申し上げているような生活の質の実現というところには、向上というところには繋がっていかない。やはり、色んな価値観があるんだということを前提にまちづくりを進めていこうとすると、そこは自ら市民が関わって、自分達の価値観というようなものをきちっと明らかにして、それを実際に調整してやっていくというようなことがどうしても必要になってくるわけで、そこで、やはり、いわゆる参加型のまちづくりとか、合意形成というのが非常に大変ではあるけれども意味を持つようになってくるわけで、そのプロセスを経てはじめて、岡谷らしい街というのも出来てくる。そうじゃないと、行政というのは、どうしても国の制度を使ったりとか、とにかく常にどこにも均等に公平にということが行政の原則ですから、そうするとなかなか特長のある街とかいうのもできてこない。そういう意味では、やはり、もっと地元の、そこに生活している皆さんが動かない限りは、皆さんが必要とする街はできないというふうに考える必要があるのではないかと思います。

それから、あと、先程ちょっと申し上げたソーシャルキャピタルという考え方、これはまさにキャピタルというのは資本ですから、街の力というのは、こういう今までのような物的な道路がどうだとか、施設がどうのこうのということだけじゃなくて、日本語では社会関係資本とか人間関係資本とか市民社会資本とか言われていますけれども、そういうものをどうやって充実させていくかということも非常に大事なことであります。それは、そういった人々の協調行動というんですか、それが活性化することによって、社会の効率性とか社会の質を高めることができるというふうに言われていますし、それからもう一つ、そういうところに人々が参加する熟度が高い地域こそ、そこで住民は高い幸福感を持っているということが言われています。ですから、参加するということは受身ではなくて、そこで、ある意味では、自分達が自らの幸福といいますか、そういうものを獲得する一つの手掛かりだというふうに考える…一つの手続き、手順だというふうに考えていただいても良いんじゃないかと思います。

という中で、もう少し最近では、エリアマネジメントなんていう考え方が出てきています。これは、

地域のことは、自分達でちゃんと責任もってやるよという発想でもあります。これは、元々、アメリカ辺りで衰退した中心市街地をどうするかというところから出てきた動きであったりしますが、実は、東京辺りでも…あまり東京へ行っておられない方はちょっとピンとこないかもしれませんが、例えば、東京の丸の内という所が非常に大きく変わってきていて、昔はオフィス街で、夜とか週末に行くとゴースタウンで何も面白くないような街だったのですが、今は非常に若い人達から色んな人達が道にあふれるような街に変わってきています。それは、街全体をエリアマネジメントという考え方で、自分達で自ら街の運営、経営をやるというような…さっき、ちょっと申し上げたある種のガバナンスという考え方で、自分達で…もうちょっとという自治意識みたいなものですね…そういうものを持って色々やっているというところが出てきています。

ちょっとだけご紹介しますが、地元の私に関わっていたということで申し上げますと、茅野市の駅前に茅野市民館というのがあります。(パワーポイント\_スライド No.103)これは、私が紹介すると手前味噌になってしまうのですが、これは、本当に構想の最初から現在の運営に至るところまで、かなりの市民の方が参加しているということで、施設そのものだけの評価じゃなくて、色々な形で評価を頂いている部分があります。一つのプロセスとして、たかが一つの施設なんですけれども、施設自体も私自身が、たまたま茅野市の行政アドバイザーをやったこともありまして、施設一つ作ることがまちづくりなんだということを私の方からも提案させていただいて、まちづくりとして施設づくりをやりましょうということを提案して、ある意味では、私も提案させていただいたプロセスに沿って物事が展開されたというケースだと思っています。

ざっとだけご紹介します。基本計画策定ということをやりましたが、これは「茅野市の地域文化を創る会」という市民だけのグループのワークショップというのをやりました。(パワーポイント\_スライド No.104)9回くらいやって、施設の構想というのを…ちょっと私も居ますけれども、まず市民利用施設、中心市街地にこういう施設を作るということは、どういう意味があるかということの色々話し、特にまちづくりとして施設をどういうふうに捉えるのかというようなことを色々やったりしています。(パワーポイント\_スライド No.105)あとは、どういう機能を入れるかということを含めて導入機能の組み合わせとかですね、それこそ美術館の欲しい人、図書館の欲しい人、ホールの欲しい人、色々な人達が参加して、それぞれ自分の権利を主張するところからスタートはしています。(パワーポイント\_スライド No.106、107、108)ただ、これは面白いもので、市民の中で色々議論していくと、お互いにお互いの言っていることを少しずつ理解するようになってきて、少なくとも構想のレベルでは、皆譲り合って、一応、ある当初想定していた規模の中で、皆の要求がほぼ入るといった計画にもっていった。これは、私の経験からいっても非常に稀なことですが、そういうことがあります。こういう色々なワークショップといって、皆が意見を出し合ってやるというようなことですね。時には、市長さんも覗きに來たりしていたのですが、そういうこともありました。(パワーポイント\_スライド No.109)

それからあとは、設計に入っても、設計者との間で色々やりとりをしまして、とにかく計画というものを作る段階でも、市民と設計者が50回以上ワークショップというのをやったりしています。(パワーポイント\_スライド No.110)これがそうですね。(パワーポイント\_スライド No.111)その計画策定の時

の色んな形での会合をやって…これを見ていただくと色んなそれこそ…3つの部門・機能をどうやって組み合わせるか？組み合わせたら何が出来るか？というようなことを色々議論しています。(パワーポイント\_スライド No.112) こういう計画を作る際に色々一緒にやった。(パワーポイント\_スライド No.113)

それから管理運営。(パワーポイント\_スライド No.114) 施設をどうやって使っていくかというようなことでも、ここにありますように60回以上の会合、ワークショップといわれるようなことをやって色々皆で議論をしています。この中でも、もちろん細かい設計の話も時々入ってきますけれども、やってですね、とにかくここをどうやって使うのか？市民が使う場合、どういう事業計画だったら出来るのか？1年間のプログラムを考えてみるとかですね、そういうことも含めてやっています。(パワーポイント\_スライド No. 115、116、117)

それから、最後、古い市民会館を取り壊す時にも、これも市民が関わる最初のきっかけだろうということで、さよならイベントの企画というものも全部市民が関わって色んなことをやりました。こんなこともあります。(パワーポイント\_スライド No. 118、119)

最後はですね、運営するための組織をどういうふうに作ろうかということを議論して、ここにありますように「友の会」を作ったりとか、色んな形で市民が関われる場所というのをどうやって作っていくのかということをやりました、ここにもありますように市民参加の組織として「友の会」とかサポーターであるとか色々様々な企画を外で受けてやるような施設まで…茅野の場合、NPOの組織ができて、中でやる催し物のある比率は全部そこで受けてやることとなっています。(パワーポイント\_スライド No.120、121)

そういう中で、色んな教訓を私なりに得ていまして、形式的な市民参加というのは、やはり限界がある。(パワーポイント\_スライド No.122)やはり、市民もそうですけれども、どちらかという行政も、お互いに参加したということの、言葉は悪いのですがアリバイづくりのような、そういう市民参加というのが非常に多かったわけですけれども、これは別に行政の責任でも、市民の責任でもなく、やはり、それまでの市民と行政の関係を象徴しているところがあって、そういう形式にならざるを得ないところがあったのですけれども、やはり、パートナーシップというようなものになっていくということが非常に大事であるということですね。

色んな利害関係者が参加してくるということも大事ですし、それから、それを進めていく手順といいますか、市民参加のプロセスのデザインと書いてありますけれども、そういうことも、どうやったら市民がよく参加してくるかということを考えることも非常に大事だろうと思っています。

もう一つは、市民参加にあっても、どこかで専門家の参画・協働というものが必要であるということも…これもそういった中で実感したことでもあります。(パワーポイント\_スライド No.123)恐らく岡谷市にも色んな専門家の人が居ます。そういった人的資源をどうやって参加型のまちづくりの中にどうやって取り入れていくかということも非常に大事になってくるだろうと思います。これもご承知かもしれないですが、茅野市の市民館でこういうふうな形です。これがそういう議論の成果だと考えていただければと思います。こういう図書館なんかがあるこういう場所もどういう場所にするんだと。これはどちらかという広場のような場所を街の中に、広場のような場所を施設の中にするんだと。駅に直

結して、駅の中で待つんじゃないかと、ここでちょっと時間を…列車を待っていても良いんじゃないかと。そんな発想の中で出てきて、そういった所にちょっとした図書コーナーがあればもっと良いんじゃないか…そんなような議論をしながら実現したということです。

単なる設計者のアイデアで、こういうものがいきなりできたというわけではないということをご理解いただければと思います。こんなようなことを色々濃く議論してやった成果であると考えていただければと思います。ですから、基本的に市民利用というものをベースとして、その時に当然議論したのですけれども、やはりカノラホールがあるから、これはこれで地域にあるのだから、同じものを造る必要はないんじゃないか？それはそれで、茅野からも利用しに行けば良いだろうと。それに対して、茅野市民館というのは、もう少し市民の人達が利用するということをベースに考えるべきだろう、だからホールの規模は小さくて良いんじゃないかというような話も色々とされたことです。(パワーポイント\_スライド No. 124~138)

これは、市民の間で、オープニングの時に若い人達がディスコにしようということで、ちょっとそういうことを実現したりですね、これは。逆に言えば、ある意味では、行政が企画したら絶対にできなかったものでもあったりすると思います。(パワーポイント\_スライド No.139) こういう大きなホールですけれども、普段は客席がある所を全部移動すれば、これは広場になる。こういう使い方もできますよということなのです。

同じように茅野の駅の周りのまちづくりというのも、私がちょっとお手伝いしまして、私の学生なんかも一緒に街に入って、一緒に西口をどうしたら良いかということ随分何回もワークショップとか、ルールをどうするかということもやりました。(パワーポイント\_スライド No.140) 実際にこういう状態だったですね。(パワーポイント\_スライド No.141) 最近、こういうふうルールを作って、建て替え自体は、全部それぞれ個別にやっているわけですけれども、それなりのルールの中でやって、こういうものが前と少し違う形で実現した。上の写真の左側は、元々あった街を上手に使っているということですが、少しそういう環境を作った。(パワーポイント\_スライド No.142、143)

左にあったような水路も、実は建替えに併せて、少しこういうふうな形で…同じ水路も下水道のような形から、もう少し人の通る道に沿わせた水路にしようということで、たまたま設計もお手伝いしました。(パワーポイント\_スライド No.144、145) 駅前もそうです。(パワーポイント\_スライド No.146、147) そういう議論をして、これもちょっと私の方でお手伝いしていますけれども、こういう駅広場を作り出したという…こういう中に、私ども専門家が一方的に押し付けるのではなくて、やはり、どういう広場が必要なのか？ どういうものを求めているのかということ議論の中で、最終的には専門化が取りまとめる形にはなっていますけれども、色んな選択肢を専門家の方から皆さんにご紹介して、その中から皆さんが選ぶという形を採っているということです。

ちょっと時間があれですので、エリアマネジメントなんていうのはですね、こういう考え方が今あるよということで、これは街の経営というようなものを、まさに街を自分達で経営するという考え方ですね。(パワーポイント\_スライド No.148) そこには土地の所有者ですとか企業とか行政と一緒にあって関わっていく。まさにパートナーシップの仕組みとして、こういうエリアマネジメントというようなことをやっているわけです。その中には、実際にまちづくりのルールを作ってみたり、安全・安心の維持

向上というようなことをやってみたり、文化活動をやったり、街のプロモーションをやったりということですね。(パワーポイント\_スライド No.149、150、151)

最終的には、街の誇りと価値を再生するということですし、ここにあるようなことを実現するためにエリアマネジメントというように行われているということです。ちょっと、この辺についてはもう省略します。アメリカなんかでも、どういう活動をしているかということですが、実際、一つの例としてですけれども、ニューヨークでニューヨーク市立図書館の脇に公園があったのですが、ここは本当に、日本で言えばホームレスや、とにかく問題のある人しか集まって来ないような公園だった所が、ここでエリアマネジメントのNPO的な組織が、そこを管理するようになってから、街が大きく変わっていったという例です。(パワーポイント\_スライド No.152)成功事例として取り上げられている公園ですが、まさに公園が本当にパブリックスペース、いわゆるパブリックライフの場になっている。色んな市民が来て、こういう本が外に出てきたりとか、利用しなくなった図書館の脇の公園の屋外にこういうものが出来ているということですね。(パワーポイント\_スライド No.153)

これは全く違う場所ですが、ここは本当に危ない場所だった小さな公園ですが、ここが今、こういうふうな街の中に、ニューヨークの中でもこういう場所に生まれ変わっているという例で、これはまさに先程から申し上げているエリアマネジメントという考え方で、その組織が責任をもって色々管理とかいうことを行った結果、こういう安全で非常に気持ちの良い場所が出来上がっている。(パワーポイント\_スライド No.154)これは、同じような絵に見えますけど、また別な公園です。(パワーポイント\_スライド No.155)こういう公園がいくつか実現している。そういう成果をあげているということで、日本でもそういうエリアマネジメント組織というものが、まさにこういうことを目指して、色々な都市で動きはじめています。そういう意味で、皆さんがこれから何をすべきかということですが、まずは自分達が住んでいる岡谷市の街の資源とかいうもの、実はそこに住んでいる人ほど、それが見えなくなっているということがありますので、それをもう一度再確認するところから進める必要がある。(パワーポイント\_スライド No.156)そこに岡谷市独自の何かというものが見えてくると思いますが、それから同時に、そこで我々は何を優先しなければならないのか、「他所にあるものは全部うちでも欲しいのだ」じゃなくて、少なくとも何を優先するのかということをしつかり市民の人達が言う。それを行政が提案を受けて、その優先順位というものを具体化していくことが非常に大事じゃないかなと思っています。

あとはその中で、今、岡谷市は都市計画マスタープランというものを見直そうということで、そういう計画をされていると思います。(パワーポイント\_スライド No.157)これは皆さんにとっても非常に良い機会じゃないかなというふうに思っています。そういう、皆さんが自ら街の評価をして、先程来色々申し上げているようなこと、ご紹介したようなことを少し手掛かりにさせていただいて、積極的に、すべての人が町全体のことをすべて提案しなければならないということではなく、身近な、自分達の生活に関わっているところから、少しでも皆さん関わっていくことをやっていくことで良いと思いますし、そういう中で、恐らく、市民が創る岡谷市の未来というものが生まれてくるだろうと思いますし、特に、21世紀になって大きく社会が変わっていく中で、岡谷市のまちづくりというのは、岡谷市らしい街を創るためのまちづくりになってくると思います。

ということで、少しでも私の方からお話させていただいたことが、将来何かのヒント、手掛かりになればと思っています。ちょっと時間が延長してすみません。私の方からのお話はこれで以上でございます。どうぞ清聴ありがとうございました。

○ 司会

どうもありがとうございました。先生には日本の事例、あるいは世界の事例を参考に提示いただきまして、居心地の良い魅力あるまちづくりというものが、どういうものかというところで、分かりやすくお話をいただきました。恐れ入りますが、もう一度、先生に盛大な拍手をお願いします。

それでは、これから第2部のパネルディスカッションに入りたいと思います。少し準備がございますので、ここで約10分の休憩を取りまして、3時半から第2部を執り行いたいと思いますのでよろしくお願いをいたします。

## 第2部 パネルディスカッション

○ 司会

コーディネーターは、講演をいただきました倉田先生に引き続きお願いをいたします。パネリストには、市民の4人の方にお願いをしました。パネリストのご紹介をさせていただきます。向かって右から、駅前のフキドウ専務取締役の今井瑞穂様、建築家で片倉隆幸建築研究室代表の片倉隆幸様、絵本作家で小さな絵本美術館主宰のさとうわきこ様、昨年度まで西掘区長を務められておりました新村邦武様、以上であります。本日はお忙しいところありがとうございます。それでは、ここからは倉田先生に進行をお願いいたします。

○ 倉田

それでは、先程の私の話を長く聞いていただいて、お疲れかもしれませんが、ここからは地元の皆様に参加していただきまして、もう少し岡谷という街に即して、これからの岡谷のまちづくりの可能性とかというようなことを色々お話いただければと思っております。

それでは、まず最初に、先程、皆さん簡単な紹介はいただきましたけれども、今日おいでいただいている皆さんそれなりに色んな形で岡谷のまちづくりとか、具体的なまちづくりとは言わないまでも岡谷に色々とこだわりをもって生活されてこられた方達だと思いますので、少し自己紹介を兼ねて、いままでの岡谷への関わり方、体験、想いというようなものを順番にお話していただけたらと思っております。では、手前の新村さんからお願いできますでしょうか。よろしく申し上げます。

○ 新村

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました西掘区、新村でございます。私は、昭和12年生まれでございます。今年から後期高齢者(後期高齢者医療制度の対象となる75歳)でございます。生

まれは辰野町でございまして、父親の勤務の関係で長野の方に行っておりまして、小学校3年生頃、辰野町に帰って参りました。その後ですね、この地域に来たのが昭和35年でございます。

小さな会社を経営しておりました。自営業でございますから、役がドンドン参りまして、小学校、中学校、連合とPTAをやらしていただき、そして、民生児童委員を6期18年ばかりやらせていただきまして、大変、高齢者の皆さんのこと、福祉のことについては、私なりに大変関心がある…そういうことでございます。

それから、平成10年から西掘区へ入りまして、副区長、区長と合計13年やって参りました。それで昨年の3月31日に退任させていただきまして、現在は岡谷市の社会教育委員1年生でございますけれども、先輩の皆さんから教をいただいているというところでございます。

ざっと、私、自分なりにやってきたことを簡単に申し上げますと、介護保険制度がスタートしたのが平成12年でございます。その12年に高齢者を皆で支えていこうということで、高齢者生きがいデイサービスを立ち上げました。これは、まさに行政の皆様方から大変な力をいただきまして行ったものでございます。

それから平成14年に学校完全5日制ができました。で、自分達の地域でなんとか子ども達を育成していこうということで「ラムラム広場」という広場を立ち上げをいたしました。現在、百三十数回目かと思っております。

そして、平成15年に、地域を皆で作っていこうということで、地域サポートセンターの立ち上げをいたしました。区民の皆様と団体の皆様が全部その中に含まれ、皆で行事も協働してより良い形にしていこうということで、現在まで続いております。

平成18年に老朽化しました…耐震性が無かったものですから、公会所の新築をいたしました。これは、高齢者生きがいデイサービスの皆さんが安心して活動ができますよという願いを込めてでありました。

その後、平成21年には、そうしたものをとにかく地域においては皆さんが健康であって欲しいというような願いを込めて、健康づくりにずっと頑張っております。以上、簡単でございますが、紹介に代えていただきます。

#### ○ 倉田

ありがとうございます。それでは、さとうさん、よろしくお願ひします。

#### ○ さとう

さとうわきこと言います。東京に生まれました。年齢は言いませんけど…言いたくないです(笑)。それで、こちらに移ってから、東京と往復することが多かったんですね。仕事が子どもの絵本を描いている仕事です。それで、一番最初は、絵本の文学の方をやっていましたけれど、もちろん、絵描きにもなりたかったので、どっちも行かれずに、要するに両方やってみようかというので絵本作家という道を選んだわけです。

私が絵本作家になりました頃は、まだ、いわさきちひろさんとかが生きていらして、女の方がそうい

う道に行くのは滅多にいなかったという時代です。その頃、絵本作家になったのですけれど、たまたま岡谷にイイ人がいまして、結婚しました。

それで、来ましたんですけれど、どうも東京が遠いということで、色んな絵を見に行きたいんですけれど、電車に乗って行かなければならない。それなら自分の家で美術館をやっしまえば良いんじゃないかと思ひまして、1990年から小さな絵本美術館というのをやり始めました。

その頃、絵本美術館というのは、ちひろ美術館くらいしかなかったんですね。大変な冒険をしたと思いますけれども、今、長野県を振り返ってみますと、ものすごく沢山の絵本美術館が出来た場所ですね。ちひろさんの所も、安曇野に出来ましたし、その近辺に、沢山、絵本美術館が出来ました。でも、私は一番最初…(実際は)2番目ですけどね、あまり絵本美術館がない頃に始めましたので、とても、色んなことで大変でしたけれども、しかし、今になってみますと、そういう仕事をして、子ども達と触れたり、ご両親と触れたりする機会が多くなりまして、なんていうか…私には子どもも居ませんし、兄弟にも子どもが一人しかいませんし、子どもに触れる機会が少なかったんですけれども、とても参考になりましたし、また、色んな新しい冒険を今年からも始めたいというふうに思っています。

子どもじみた冒険が、とても大好きなので、岡谷市でもなろうことなら何か思いがけない冒険が出来たらいいなというふうに思っています。でも、結構、めちゃくちゃなことを言う人なので、成功する例は少ないかなという気もいたします。終わります。

## ○ 倉田

ありがとうございます。諏訪地域も絵本の美術館だけじゃなくて、小さな美術館が意外と沢山あるという意味では、茅野も諏訪も含めてですけど、そういう地方って、そうは無いのですけれど、あまり上手くそれが利用されていないっていうか、逆に地元の人達も、そこをそんなに意識していないってこともあるんじゃないかなということを感じたりしています。それでは、引き続き、片倉さん、お願いいたします。

## ○ 片倉

僕は個人住宅の設計を中心として活動している建築家です。住まいのご依頼をいただく方たちに十数枚の住宅調書をお渡ししまして、クライアントのご要望を丁寧にお聞きしまして、そうした内容をもとに色んな暮らし向きだとか土地の環境をイメージしまして、キッチンだとか、暖炉も作ります、家具も作ります、クローゼットも、照明器具の一部も作りますし、スタンドグラス等も設計します。そうしながら、暮らす家族の距離感のようなものを想像してきました。建築がどんな物語を語り継ぐのか、そんなことをテーマに設計しています。

先程、倉田先生のお話を聞いていまして、これだけちゃんと市民の話を聞いて街を作れば、凄いいい街が出来ると思ひます。やっぱり、街も大きな家だと思ひますので、市民にとって心地よい場所を創造していくことが本当に大切なことだと思ひます。

公共施設を言えば、唯一、昨年から母校の諏訪清陵高校の中高一貫教育・新中学棟というのがありまして、基本構想づくりのお手伝いをさせていただいております。使用する生徒や先生方の要

望はもちろんですが、教育全体のプログラムのあり方とか、地域の素材、環境との調和が大切でして、そうした観点から県の教育課や施設課の方との調整をさせていただきました。なかなか、行政の方達がやると、倉田先生もおっしゃたように一通り形式的な雰囲気にはなるんですけど、どうも個性的な部分が無いものですから、だからといって、行政が悪いとか、クライアントが悪いとか、そういう問題だけではないと思いますけれども、そういった中で同窓会も頑張りまして、自然エネルギーを取り入れようということで、太陽光の集熱だとか、それから、火の扱いを知らない子ども達が大変多いので、教育と同じように「火育」ということを考えておりまして、薪を燃やして絆を深めると…これは結果的に山の整備にもつながりますし、その他色んなことを考えてきましたけれども、地域の関係とか、自然との繋がりとか…一つの建築を作るということは、周囲に色んな関係をもたらししていくと思うのです。建物の設計・施工から運用までのライフサイクルとして、先生のお話にもありましたように、持続可能な建築をテーマに環境負荷の低減、自然との融合を考えてきております。

1階の生徒ホールに自然エネルギーの見える化としてモニターを設置しまして、現状のエネルギー使用とシステム概要を映し出して、省エネルギーに対する有効性と活用を理解してもらえたら良いなということを考えております。

もうじき、震災が発生して1年になりますけれど、本当に大切なものは何かということ突き付けられた気がするんですね。情報量が大変多くなって、社会全体が打たれ強くなっているかという問題がありまして、復元力というか、自然環境の危機的な状況を回避できる力ある地域社会とはどんなものかということとはどんなことかが問われていると思います。

そうしたことをずっと考えてきますと、まさに持続可能な建築というのは、どういうものかということ本当にひしひしと今感じているわけなんですけど、大きなイメージの中で足りないところは、生活に応じて補っていくゆとりと変化を受け入れていく建築こそ、人に愛されて、また、地域に愛されていくものと僕は信じています。

たまたま、諏訪清陵高校の中高一貫教育を伴うスーパーサイエンススクールの日常化の問題を考えていまして、やはり授業のみならず日常的に科学を体験する楽しい空間が出来たら良いなと、そういうことを考えておりまして、授業じゃなくて、建築自体が楽しければ、自然と生徒の個性形成が出来上がってくるんじゃないかということで、これは一例ですが、建築とか街は、人に生きる喜びとか感動を与えるものでなくてはならないと、そういうふうに思っています。あとで、また、まちづくりの感想とかを述べさせていただきたいと思います。以上です。

#### ○ 倉田

ありがとうございました。それでは、今井さん、お願いいたします。

#### ○ 今井

よろしくお願いいたします。フキドウという化粧品小売店を経営しております。私は結婚を17年前にしまして、下諏訪町から岡谷市民になりました。店舗と住宅が、岡谷駅のすぐ近くの童画館通り商店街という所にございます。

17年前と言いますと1995年。この当時を思い出していただければと思うのですが、1月に阪神淡路大震災がありました。そして、3月に地下鉄サリン事件がありまして、思い返せば、本当に大変な年だったと思うのですけれど、私個人は、きっと、結婚を控えてちょっとウキウキと浮かれていたのかなあ…なんて思いながら6月に結婚をして岡谷市に参りました。下諏訪の少し山の方に住んでおりましたので「なんて都会なんだろう」と、まず、感想です。1～2分行った所にイトーヨーカドーはありますし、駅はありますし、これは素晴らしい便利な生活のしやすい所だと思った感想があります。

そこから、私の岡谷の家の周りは激動の時代を迎えたというか、益々、便利になりました。次の年には、JRの立体化が出来まして、その2年後には東急が完成し、そして、童画館通り商店街も今のような綺麗な街並みになりました。

この間、私は子育てをしながら…子育てに一生懸命だったので、昼夜問わず、そこらじゅうでトンカンカンやっております、子どもがせっかく寝たと思うと、また、音が始まって起きてしまうというような所で、ちょっと大変な思いもしたなということを思うのですけれど、どんどん都会になっていく街並みに段々慣れていってしまったような感じもいたします。

ただ、そこからが、また激動です。イトーヨーカドーの撤退、それから4年後には東急も撤退ということで、街並みや、そして、人の動きもみるみる変わっていきました。思えば、本当に岡谷市で私は、そんな激動の街並み・人並みを直に触れながら見させていただいたんだなというふうに感じているところです。

先生の話聞きながら、商業というのは、まちづくりに非常に貢献しているんだなと、ちょっと自信を持ちました。私自身、商業…店頭に出るようになったのは6年程前からなんですけれども、本当に色々な人と関わりを持たせていただくことによって、色々な方の人生と一緒に楽しませていただいているように感じております。

そういったところからいくと、街を作っていくのは、私達一人一人。私なんて誰も知らない一市民に過ぎないのですが、でも、そんな一市民の声が集まったら、少し変わっていけるんじゃないか…そんな勇気を先生のお話を聞きながら思ったところです。今日は、自由に話して良いということですので、変なことも言うかもしれませんが、お客様の声なども皆様にお伝えする機会があれば、お伝えさせていただきながら、一緒に考えさせていただければと思っております。よろしく願いいたします。

## ○ 倉田

ありがとうございます。皆さんのそれぞれのご紹介で、それぞれの皆さんの人となりとか、岡谷市との関わりみたいなことは、大体、ご理解いただけたと思うのですけれども、そこで、先程、私も、私の話の中で、市民の皆さんお一人お一人が、自分達の岡谷の街を、ちおっと大袈裟に言えば岡谷の街をもう一度改めて評価していただくということが、非常にまちづくりのスタートになるんじゃないかなというふうに思っていて、それで、ここからは、できましたら、評価といっても、ここでは、駄目だよということだけじゃなくて、実はこういうことが岡谷の特徴なんですよ、他の人は知らないでしょ？というようなことも含めて、少し岡谷のこれまでの、なんていうんですかこれまでの成果、特徴で

あるとか、ちょっとこういうところを何とかして欲しいなというようなことを、もし、皆さんの、ちょっとずつ違うお立場で、お話いただけたらと思うので、もう一回、新村さんの方からお話いただけたらと思います。

#### ○ 新村

私は、ずっと地域におりましたので、あまり理論的な大きい枠の中で話は出来ませんが、たまたま、岡谷市が21区の区がございまして、そして、21区の区長会というのが毎月行われておるんですね。岡谷市民は、この21区の中に全部入っていると。ま、ちょっと例外もありますけども、とにかく、入っているんですね。従って、そういう会、区長会で行政から色々な情報あるいは報告とか行われます。それを受けて、意見交換がされるわけがございまして、非常に、私は、先生のお話の中にもありましたように、21区皆それぞれ特長のある地域の文化遺産をお持ちなんですね。なかなか、自分の地域のことは、なんとなく、よく認識しないのですけれど、とにかくあるんですね。

岡谷市の中にそういうものがあるということですから、私は、そういう地域遺産というものを今一度見直していくべきじゃないか。その中に、まちづくりのキーワードがあるんじゃないか、ヒントがあるんじゃないかと思うんですね。良いものが一杯あるんですね。そんなことで、岡谷市は、そういう組織ができていくということは、非常に強いところであると思っております。とにかく、新たに地域の良さを発掘していかなくちゃいけないんじゃないかというふうに思っています。そんな程度で宜しいでしょうか？

#### ○ 倉田

ありがとうございます。今、新村さんからは、21という区があるという、おそらく地元にいると、これも意識されないかもしれないですけども、これも一つの特徴というか、まちづくりを進めていく時の一つのベースになる…古い言い方をすれば、コミュニティの単位みたいなものが、やはり、あるということなんだろうと思います。ですから、場所によっては、まず、コミュニティの単位というのをどういうふうに設定するかということから始まる所もやはりありますので。

もちろん、コミュニティというのも、最近、地域型のコミュニティだけでなく、もう少し、テーマ型というような、逆にいえば、地区という単位ではない、例えば、新村さんがお話されたように、福祉とか、そういうようなことで繋がっていく人の繋がり方、おそらく、さとうさんであれば、絵本とか、アートとか、そういうものの繋がりコミュニティというものも、きっとあるだろうということで、そういう意味では、21という単位での区のコミュニティの存在があるということと、あと、それぞれに実は文化的な資産があるんだというようなお話でしたね。これも、色々と手掛かりとなるのかなという気がいたします。じゃあ、さとうさん、いかがでしょうか？

#### ○ さとう

私は、あまり区とか、そういうのに関係が無いような生活をしています。子ども達にいつも面と向かって、子どもを持つ親とかといつも一緒になって、話をしたりなんかしていますので、あまりこういう所

に出るような人ではないので、ロクな話にはできないんですけども、色んな行事をしています。

それで、私は、岡谷だけじゃなくて、八ヶ岳にもちょっと広い土地がありまして、そこで「お泊り美術館」というのをやっています。一番最初、どこでもやっていないことなんですけども、とにかく、親子が固まって、親子だけで見に来るとか、昔は子ども同士とか色々あったと思うんですけど、親子で固まっていて、話もロクに、お互いに「こんにちは」も言わないで、そのまま帰ってしまうみたいな感じだったのが、なんとなく面白くなって、それで、親子じゃなくて、子ども達には、昔、階級みたいなものがあった、一番上の子が下の子を見てあげるみたいなことが自然にできたのに、今の子達は出来ないんだと思ったら、泊まって何日間か寝食を共にすれば、なんか、その間に共通の話題とか、あるいは、仲良しが出来るとか、そういうことがあるんじゃないかと思って「お泊り美術館」というのを始めました。

どこもやってないんですけど、それをやりだして、ご飯も、皆、子どもでも包丁を持って、出来る限りのことをするというので、寝る時は、寝袋で寝るということで、美術館の、展示室は別として、床でもどこでも寝ていいよというふうな感じだったんですね、もちろん、夏しかできないことなんですけど。

それをやっているうちに、これでもう6~7年やってるんですけども、最初は、小さい子だった子が、もう中学生になってますね。そうすると、なんというか本当に上の子が下の子を見るというのが、誰も教えないんですけども、し始めて、夜は子ども同士で寝るということがあるんですね。その変化というのは、素晴らしいなと思いました。

それと、親は親同士で、今度は…私も呑みますけど…夜中まで、ちょっと子どもはほったらかしにして、色々、愚痴話とか、「幼稚園でこうなのよ」とか、「今、小学校はこうなのよ」とかいう話をしながら、夜中、皆で廊下で、座り込んで呑んで話をするという楽しい付き合いもできるようになったんです。

それで、なんというか、その場の付き合いだけでなく、もっと大きなお付き合いを、それから始めるようになったというか、割と親密な関係になっていくんですけども、そういう親子とか、なんというか、昔のような子ども達の関係というのを見て、やっぱり、私は「お泊り美術館」をして良かったな、そして、美術館を作った良かったなというふうに思いました。なんか変な話になって…いいかしらね、そんな話で。

## ○ 倉田

僕は、充分、伺っていて、まちづくりの話だなと伺いました。やはり、街というのは、子どもを育てたり、場合によっては、子どもだけじゃなくて、色んな意味で、人が育つ環境でもあるし、私自身も、改めて、この地を離れた時に、あの環境で育ったんだなということをすごく実感しますし、たまたま、私の同級生で、たまたま、今、同じ大学で教えたりしているんですけど、茅野出身で藤森照信という変な建築を作っている男がいますけれど、彼などと話をしても、やはり、この場所で我々生まれ育ったというのは大きいよねと言うことがあります。

それは、今、お話あったようなこともそうですし、知らず知らずの中で、自然との付き合い方というのを、そんなに難しいことを考えずに日常的にやっていたというようなこともありますので、なんかそ

ういうものが、どこかで、あんまり若い時には、意識しなかったかもしれないですけども、段々、そういうことを感じるようになってますので、そういう意味で、この地域というのは、子どもが育つ環境としてどういふものが必要なのか、皆、同じようなものをここで準備する必要はないと思いますけれども、やはり、この岡谷という地に育って良かったというような、そういうものがあつたら良いと思いますし、それは極端にハードだけじゃなくて、色んなそういう取り組みですかね。

ちょっと私が勝手なことばかり言っちゃ恐縮なんですけど、私も、実は、諏訪市がやっている蓼科保養学園というのがありまして、そこに行って、それこそ3ヶ月ですかね、親から離れてずっと共同生活をする機会があつたというのがありまして、それは、非常に、私にとってみると、小学生で行って、皆、自分でやらされるわけですから…食事は作りませんけれども、そんなような経験も結果からすると非常に良かったのかななんてふうに思いますので、そういう機会というのは、どこにでもあつた子ども頃思っていたら、実は、そんな機会はこの地にしかなかつたというのが、後でわかるわけですけども、そういうようなものも含めて地域には色んなものがあるわけで、そういうものを発見していくということが必要だし、そういうことをもう一つのきっかけとして、何か次のことが出来そうだなという気が、今伺っていても感じました。では、片倉さん、いかがでしょうか。

## ○ 片倉

今、先生の話に引き続きまして、岡谷市の好きなところを挙げろといつたら何があるかという、湖畔公園は、僕はジョギングするので、とても好きなんですけれども、市では、とても良いものを作つていただいたなというふうに思っております。

で、子ども達が、湖畔公園を歩いた時にどんなふうを感じるのかなと思つて、あそこに覆いかぶさる木立や、なんか建築の空間を走っているような気がして、僕はとても楽しいのですが。

自然が豊富なので、できれば建築や自然との相関関係が街の中にも生かされてくると、どこにもない岡谷独自の街が出来上がってくるんじゃないかと楽しみにしてるわけなんです。

新村さんの話にもありましたように、遺産、色んな素晴らしい遺産が残っているということをおっしゃいましたけれども、確かに日頃注意して見ないと分からないんですけども、社会資産としての建築や歴史的な建築の保存再生というのも岡谷市では続けていると思うんですけども、今に使える姿にすることが、僕は必要だと思うんですね。昭和3年生まれ諏訪市の片倉館も、僕は大好きな建築の一つで、僕は修士設計の時に取り上げたんですけども、市内でも製糸業当時の立派な建築も数多くあるわけです。この隣に、見事なスクラッチタイルの表情豊かな昭和11年生まれ旧岡谷市庁舎の歴史的建築物というのがあるんですけども、そこに消防署がありまして、この間、新聞に出ておりましたが、新しい消防署がちょっと上の方に出来るわけなんですけども、この後、どうなるのかということに非常に楽しみにしております、やはり、今のように単体が意味するような用途ではなくて、情報量をもっと取り入れて、倉田先生がおっしゃったようにレストランとか、海外の色んな映像を見せていただきましたけれども、あんなイメージが皆さんご覧になって、色んな利用ができると思うんですね。ですので、日頃の市民の生活空間の延長として使えるものでないと意味を成さないんで、博物館的に外から見ているんだと、やっぱり愛着が湧かないので、ああいった、なんという

か昔の建物を肌で触れて、考えて、昔を思い出して、今に繋げていくというような…独立した今の建築の新しい個性ではなくて、伝統に学んでいくというか、繋がりがあった個性というものが、僕は必ずあると思うので、そういったものを自ら体験していくことが必要だと思うんですね。

で、小学生とか子どもさんのお話も先程出ましたけど、子どもをどういうふうに教育していくかということは、とっても大切なことで、学校の先生が授業で教えることというのはとても大切なことなんです。今の子供達は外に出て触って考える、自ら創造するということは、僕は非常に足りないと思うんですね。僕らが小学校低学年の頃ですか、「明日の岡谷」なんていって、市長さんが、明日の岡谷がどんなものになるかという模型を作らせていただいたことがあったかと思うんです。それって、小学校6年生くらいの先輩達が、すごい模型を作りまして、なんか、僕達、低学年でしたけれども、凄い夢を与えていただいたという…今、そういうことが無いので、できれば空いているストック、なんていうか、使われていない空間が一杯あると思うんですね。そういった所をどのように使うかというようなアイデアを小学生達に出させる。で、僕等建築家は、やはり、そういった所に出向いて行って、教育のお手伝いをすると…そういうことが大変大切だと思うので、まずは創造だと。

足りないものがあつたら、小学生達に、まずは買い与えるんじゃなくて、無かつたら自らものを作り上げるということを教えるべきだと、僕は思うんですね。そういったことが、非常に大切だと思っております。また、後で話させていただきます。

#### ○ 倉田

ありがとうございます。先程、お話があつたような岡谷市にある色々な建築的な資産とかですね、色々環境資産というようなこともあると思いますので、そういうものを、やはり、どう使っていくか、どうするかということも一つの手掛かりに、まちづくりに充分なるだろうと思いますし、それがさらに色々な面に広がっていった時に、子どもが育つ環境にも広がっていくのかなというようなことで…。

私が司会なので、あまり喋っちゃいけないんですけども、やはり、先程もお話したように、この地に育つて本当に良かったなということは思うことがあります。それは何かというと、学校というところかということ教室という感じがするんですけど、たまたまそこで私が習った先生というのが、そうだったのかもしれないんですけど、子ども達をとにかく色々な所へ連れて行くわけです。それこそ、山に一緒に行ったりして、そこで飯盒炊爨をやってみたり、色々なことをやったり…とにかく、そういうことをやって…そういう意味でいくと「街が教室だった」というくらいの印象が、やはり、改めて、私なんかも思っているんですけども、そういう教育というのは、多分、こういう地域でなければできないのかなというふうに思います。そういう意味で、まさに教室をどういうふうにする、子ども達が育つ環境をどうやって作るかということは、そういうことでもあるのかなというふうに思ったりもしています。じゃあ、今井さん、いかがでしょうか。

#### ○ 今井

今までの岡谷市がやってきたことを評価なんてのは、とてもおこがましくて、できないんですけども、実際に感じているところでは、やはり、やまびこ公園などは、子育てをしながらとても利用させ

ていただいて良かったなど…これから、新しく出来ていくというところで、楽しみでもある所です。で、今、私、湖畔公園と言いましたっけ？湖畔公園ですね。湖畔公園です。すみません。

やまびこ公園などは整備がされまして、色々な施設などもあるというところは、生かしていくべきものがあるというところで良いことではないかなと思っています。ただ、残念なのは、やはり、それが生かされてないというところで、30代のお母様が、お客様でいらした時に、ジムに通いたんだけど、探しても岡谷にジムが無いと…。あれ？やまびこ公園にジムは無かったかしら？と思ったのですが、それがインターネットで検索してもヒットしなかったような感じのお話をされていまして、ここは検索の仕方もあるでしょうし、あとは情報を発信する発信の仕方の工夫というところも一つ考えていくところもあるのかなというふうに思っています。生かそうと思えば生かせるものが沢山あると思うので、生かされていないことは残念だなと思っています。

あと、自分の故郷に誇りを持つというのは、凄く大切なことだと思うのですが、残念なこととしては、誇りを持っている市民が少ないという…これは市役所の方からいただいた前回の2007年の国勢調査の資料があるのですが、これを見させていただいた時に自分の街が好きかというような質問の中で、近隣の7市町村の中で岡谷市民の回答というのが下から2番目だったのですね。

住み良い街かという質問に対しても、岡谷市民は下から2番目というところで、市民が誇りを持っていないというところが非常に残念なところで、ここを先生もおっしゃっていらっしゃいましたけれども、誇りを持てるところは一杯あると思うんですけども、駄目なところばかりを言うのではなくて、やはり、良いところを皆で探していこうという、そういう姿勢がこれからは大事なかなと思います。

あともう一つ、こんなことを言ったら怒られるかもしれないんですが、この会に関わる皆で一度集まる機会がありまして、その時に「どうも市民は注文しか付けない」というような意見がちょっと出てきた時に、その上司の方が「いや、待て」と。「それは、岡谷市も行政も聞く耳を持って来なかったんだ。これからは、そうじゃない。皆さんの声を聞いていくんだ。市民の皆さんの声を生かしていくんだ。」というふうに熱心におっしゃって下さって、なので私も「やっぱり、出していただく」というふうに思ったところもあるんですけども、そこで、今、きっと変わろうとしているというところを行政と市民とともに共有しながら、やっぱり、一緒に頑張っていきたいな、そう頑張れる希望が、少し見えたところ、凄く期待したいところだと思っています。

## ○ 倉田

ありがとうございました。実は、この次に、問いかけようと思っていたお話も少し出てきてはいるのですが、岡谷市の良いところ、悪いところみたいな話は、逆にそれだけ聞いても、なかなかお答えにくい部分もあると思うので、逆に、自分だったら、岡谷の街に、こうしたら良いんじゃないかとか、こんなことしたらもっと良くなるよというようなお話とかですね、そういうと、また大袈裟になっちゃいますけど、なんか提案できるようなこと、まちづくりでこんなことをやったらどうかというような話がありましたら、お話いただけたらと思うんですけど、その時に、私自身、たまたま諏訪の生まれで岡谷に来てはいるんですけど、私が生まれ育った頃に比べると、それぞれの市とかいう単位は、逆に…当時は市内だけでも凄く広いような実感があったんですけども、今は、結構、行政界を越えて、

諏訪市全体が生活圏になっていたりというようなことがあるんじゃないかなと思うんですね。まだ、どうしてもそういう意識になっていない方たちもいるかもしれませんが、実際の生活は、結構、そうなっているのかもしれないということもあるので、必ずしも岡谷市内に限定しなくても、結果として、諏訪地域全体が良くなれば、岡谷も結局は良くなるわけですし、同じ地域の中でも、それぞれがそれぞれの特徴を生かした、それぞれの役割をもって、上手く市が育っていけば、地域全体が良くなるのだろうと…そういうふうな、少し広域的な話でも結構です。

もっと身近な本当に自分の生活の範囲の中での感じられている小さなことでも良いので、こんなことができるんじゃないかなという日頃お思いになっていることがありましたら、是非、その辺りのお話していただきたいなと思って、今度は、あまり順番で喋るというのもあれですから、どなたかいかがでしょうか？じゃあ、片倉さん、お願いします。

#### ○ 片倉

昨年、UIAといって国際建築家連合の東京大会がありまして、3年に一遍、世界中で開かれているんですけども、その中にイギリスのCABEという運用状況の報告がありまして…CABEって難しいんですけど、実は、建築・まちづくりの協議会のようなものなんですけれども、市民が自分達の街に対してデザインレビューをするんですね。デザインレビューというのは、成果物を複数の人がチェックするんです。これは、大変大切なことで、こうしたことの継続が美しいイギリスの街並みを作ってきたんだと僕は理解したわけなんですけど、やはり、市民にそういったデザインレビューへの参加する機会を設ける。例えば、僕の作った建築でも良いですけども、例えば、公共建築でどなたかが設計したら、ここは良くないとか、そういったことを皆で話あえる機会を設ける。そういったことをきちんと皆が聞くと。市民が基本計画についても意見を述べるようなステージを作っていくと、それは市民も行政も一緒にやっていかななくちゃいけないんですけども、大袈裟に言っちゃうと、どこから入り込んでいって良いかわからないのですが、きっかけはどんなところからでも良いと思うんですね。で、やはり、愛着をも持つ市民こそが設計者だと思いますので、そういったところを自由に話せるようなデザインレビューという格好いいんですけども、建築を批評する集まりみたいなものを公にしてしまうと、勝手にできないというか、皆、責任を持って作るようになりますので、なんか約束事というか、歴史から流れてきたデザインコードみたいなものとか、人から教えられてきた約束事みたいなものが守られる、それから、個性も守られるということになると思いますので、そういったことを岡谷市でやってみたら素晴らしいことになるんじゃないかと思うのですが、どんなものでしょうか？

#### ○ 倉田

私も先程ちょっと話があった世界建築家連合の大会でいえば、実行委員のメンバーだったので、色々そういう話も聞いています。ただ、なかなかイギリスでやっているようなものが日本に持ち込むとなると、元々の大きな基盤になっている制度がちょっと違うんで難しいところも正直あるんですけど、もう少し、私は、気楽にそういうことが口にできるような状況になれば、まず良いのかなと…例えば、先程詳しくはご説明しませんでしたけれども、仙台なんかの場合は、市民の景観パトロール制

度なんてのがあって、それで罰するとか、そういうことではないんですけど、市民の集団があって…もちろん役所が中心になって、そういう良い建築を表彰したり、賞を与えたりという制度は、色んな都市が持っていますけれど、それもそうしちゃうと少し堅苦しくなっちゃうんで、そうじゃなくて、率直に「あの広告看板は何とかならないの？」というレベルからで良いと思うんですね。「あの建物の色はちょっとどぎつくないか？」というようなこととかですね、逆に「あれは良いじゃない？」というような話も含めて、そういうものが、個人的な意見であっても、もう少し外にまとめて出せるような機会というのがあると良いのかな…それは、実際、仙台市なんかは景観パトロール制度とあって、年に…勝手に挙げちゃうんですけど、勝手に「あの建物は良い」とか「ちょっと問題あるよ」というようなことを言っちゃうんですけど、役所がそれをやると色々差し障りがあるんですけど、もう少し気楽な形でそういうことをやって、またそこで議論する。「なぜ、それがおかしいの？」ということまで踏み込まないと、多分、単なる好き嫌いの話になっちゃうと思いますけれども、そんなようなことをやっていることもありますから、特に、今回、岡谷氏の方では、景観法に基づく景観の計画も作って、やられるということなので、大きな枠組みとしては、これまでと違って、また色んなことを岡谷市がやられることになると思いますけれど、もう少しそれだけじゃなくて、ちょっと市民側からも、そういうことをしっかり言っていくような…いきなりそこと比べちゃいけないですけど、パリなんかは、もう本当に市民の人達が色々普通に建築とかですね、もちろんアートも含めてですけど、そういうことを、皆、専門家でない人達が、結構、日常的に議論するような状況なんです。そういう所というのは、やはり、うるさい市民がいると、皆、建物を建てたりする人も、少しは気を遣うようになるんですね。ま、銀座が実はそうなんですけれど…銀座と岡谷を比較するとちょっと距離があり過ぎちゃうんですけど、そういうことをやったりしています。それも一つの、さっき街をもう少し質の良いデザインにしたらどうかとお話させていただきましたけれども、そういうことを進める一つのきっかけにはなるのかもしれないという気がしました。

いかがでしょうか。他に何か、もし、どんなご提案でも結構です。今日は色々お話の中に、例えば、新村さんの方から、意外と高齢化社会とか福祉の話とかというのが出てきて、やはり、これからの社会、必ずしもまちづくりだからといって、ハードなことばかり全部関わっていくわけじゃないんで、やはり、福祉の問題というのは非常に大事で、これは行政も色々と苦勞されていると思いますけれど、日本の色々な福祉の制度も色々議論されています。そういう中で、多分、共助であるとか公助であるとか、そういうような話も含めて色々出てきていると思うんで、地域で福祉なり高齢者への対応をどうやってやっていくのかなんてのも凄く大事になってくるような気がするんですね。ですから、それは住宅の問題だけじゃないと思うんで、そんなこともあるんで、いかがでしょうか？新村さんなんか、お考えになって、そういうことでも結構です。他のことでも結構です。いかがでしょうか、新村さん。どうですか？

## ○ 新村

何しろ、ここから見ていると、各分野で大変活躍をされている方ですとか、リーダーの皆さん方ですんで、なかなかこんな話して良いのかなというように、実は思いなんですけど、先程、片倉さんが

お話がありましたけれどもですね、湖畔の公園が非常に整備されて、本当に素晴らしい景観。私どもですね、ノルディックウォーキングっていうのをずっとやっているんですが、湖畔をよく歩きますけれども、素晴らしい…本当に…所ですね。

ちょうど、今度ですね、横河川の河口に橋が架かるということで、完全に諏訪湖一周ができるようになりますよね。で、よく思うことなんです、非常にこんなに環境に恵まれて、風光明媚な所というのは、これは本当に岡谷市の大きな財産だと思うんですね。資産だと思うんです。で、欲を言えば、諏訪湖ハイツから向こう側、下諏訪堺まで浚渫されているあの辺が、また緑の地が変わってくれば「やあ、良いなあ」と思うんですね。非常に難しいことですが、あの辺に諏訪をずっと回ってみて、原田(泰治)美術館とかですね、赤彦(記念館)、そしてまた諏訪の北澤美術館、あるいはハーモ(美術館)、そして岡谷に来たら、ここにいらっしゃる小さな絵本美術館ですとか、また、湖畔端じゃないんですが、ちょっと入れればそうなんです…そういう湖畔端に美術館みたいなものが出来たらいいとか、文化芸術が一堂に会する場があれば、私は、すごく諏訪広域の中で大きな位置を占めてくるんじゃないかと…市長さんもおいでですので、また、長くひとつおやりになって、そんなことも考えていただきたいなというふうに思っております。

いずれにいたしましても、岡谷に住んでみたい、岡谷に行ってみみたい、Uターンして岡谷に帰りたい、そういう想いのあるまちづくりというのが一番大切だと思うんですが、私、先程、こちらの(さとうわきこ)先生がおっしゃった岩崎宏美さんですか…ちひろさんですか…宏美は、あれは俳優かな…ごめんなさい。あそこへ何度も、研修か何かに行くときに必ず寄るんですね。松川“村”なんですね。しかも、周りを見れば田んぼと畑ですよ。観光地も無いですよ。でも、皆さん行くんですよ。ですから、岡谷にそういうようなものができたら、観光面でも随分人を呼べるんじゃないか、夢があるんじゃないか。

で、私はプランの中で理論的に云々というのじゃなくて、とにかく、いつの日にか、いつの日にか、そういう時があるんだ、市民の皆さんが夢を語る、希望を語る…そういう場所づくりって、あったら良いなと思うんですね。

で、地域に来ますと、今、高齢化社会を迎えて、脚が悪くて歩くのも大変だなんて人が非常に多いんですね。だから、地域の中にも緑の…小さな公園でも良い…そんなものがあれば良いなと思うんです。で、これは注文ですけど…丁度、部長さんもいらっしゃるんで…(JRの)高架線なんか凄いですね、岡谷は。上諏訪へ行くと何故か無いんですね。岡谷は素晴らしいと思うのです、そういう点では。ところが、高架線の下はなかなか有効利用がされていないんですね。もう、雑草が生えているような所ばかりですね。ああいう所を是非有効利用できるようにしていただくとありがたいな。そして、地域にずっと高架線ありますもんね。そんなことを是非注文したいですし、私たちが生活するのに、そういう時代になってきますので。

いま一つ、ついでもございますので注文させていただきますけど、果たして、これは賛否両論あると思うのですが、私の所はたまたま田中線という幹線(県道)に居るものですから、凄く岡谷市は綺麗な街路が出来ているんですね。しかも、その(街路樹の)樹種も違うし、花も違うし、私の所は、丁度、カツラなんですけれど、カツラの下に低木があるんですけれども、ところが、凄く良いんですけ

れども、場所によっては困る所もあるんです。なかなか、虫が集っても消毒は、なかなか県ではしてくれないんですよね。再三、皆さん、私の近くの皆さん方が、地方事務所へ連絡して、ようやく消毒をしてくれる。そして、その下の低木は、これもなかなか手入れができないものですから、草だらけになって、なるだけ自分達で取っていかうということで皆さんやっているんです。そういう中で、今の時代というのは、もう高齢化が進んできていますから、あの歩行の空間というものは、広く欲しいんです。で、あの植え込みがあるということは凄く良いんだけど、一面ですね、車椅子の時代になってくればですね、あるいは、私の所では(岡谷)東高の生徒が頻繁に自転車で通るものですから、もう狭いんですよ、今でも。だから、あの植木が取れば、良いのかなあ…これは皆さんに申し訳ない言い方ですけども、実際に生活をしてみて、やはり、そうしたことも考えて、将来いつて欲しいなというふうに思います。車椅子が来れば、通れないですよ、本当に。もう、一番端の、植え込みの一番端に寄っていかなければいけない。凄く都合は良いのだけれど、また一面、そうした面がある。高齢者時代を迎えてのプランというものは、やはり、そういうところへも配慮して欲しいなというふうに思っています。以上でございます。

#### ○ 倉田

ありがとうございます。色々、実感のあるところで色々お話いただいたと…恐らく今お話になったことというのは、日常的に色々とお感じになったことだと思うのですね。だから、逆に、皆さんがもっと、特別な場所じゃなくても口にして、じゃあ、それをどうしたら良いかということを皆で考えられる機会が出来てくれば良いと思いますし、また、緑の問題というのは、どこでも非常に悩ましくて、葉っぱが落ちてきて敵わん、虫が付いて適わん、切って欲しいという人が居ると思うと、なんで緑を切るんだという、非常に緑を巡ってどこでも色んな議論がありまして、この辺も、実は正解が無いわけなんですよね。だから、そういう意味では、逆にいうと、皆で議論して、そこで自分達はどういうことを優先するかということをきちっと考えなきゃいけないということと、あとは、やはり、全て行政にお願いするんじゃなくて、自分達でやれるところは自分達の責任でやる、また、やれるような仕組みを作っていくということも必要なのかもしれないですね。

結構、道路のこのなんかでは、緑については、そういった制度を導入している所もありますので、そういうこともあるのかなということがありますし、あと、最初の方にお話があったような、緑と歩行者の、ある意味ではネットワークと申しますか、それを繋いで、本当に高齢者の方達…高齢者だけではないとは思いますが、非常に気持ちよく街の中を日常的にも歩けるようなそういう場所を…まさか諏訪まで歩いていく人は居ないと思いますけれど…やはり、そういう場所がずっと繋がっていくことは凄く大事ですし、それが特に歩ける場所と緑が一体になっているというのが、岡谷辺りだと当たり前だろうというふうに思うので、そういうふうな形のことのできていると良いなと思います。海外なんかで、実は、歩行者計画というのが出来ていて、街全体の歩行者と自転車の計画というのは、別にちゃんとした計画として作って、その時にお話にあったような歩道の環境をどういうふうにするのかというようなことから、全部、使い方も含めて、色々そういうことが計画されているというのが、アメリカあたりでも出てきていますし、ヨーロッパでも出てきていますんで、そういうものも、もうあるん

だろうなっていうふうな…ちょっと伺っていて。

やはり、今日、特に会場を見渡すと、どちらかというご高齢の方というか…まだまだ若い、元気だと思えますけれど、年齢でいえば、私ももう前期(高齢者)に入っちゃっているんであれですけど、そういう意味では、そういう方達が随分居て、それなりに、また、お元気だったりする。そういう人達が、もうちょっと街を自由に使って色々できるような、そういう意味でも、やはり歩くということ…先程ちょっとお話をさせていただいたんですけども、特に、全部を歩いてというのは無理であっても、ある所は、街は歩いて楽しもうというような、そんな街にできたらなあというようなことは、ちょっと今伺っていても思った次第です。すみません、あまり私は意見を言っちゃいけないので…。どうぞ、さとうさん。

### ○ さとう

めちやくちやな意見を言います、すみません。キャンプ場の話なんですけど、湖畔に赤土が盛ってあるような所が沢山あって、木が生えていない…先程もおっしゃいましたけど…木が生えていない所が結構あるんですよ。そういう所をエコのキャンプ場にしたらどうかと思ったんです。

私には、友達が、秋田と山形の間の方に朝日山系という山があって、その麓に住んでいる方が居て、彼は全部エコで暮らしていますね。で、トイレもご飯も全部お水を凄く大事にして、その方と一緒に、実は、この間、ご飯を食べたら、お皿も全部きれいに真っ白になっていたんですね。よそったものを全部パンできれいに拭いて食べて、そして、洗う部分は物凄く少ないという、そういうことを実行してらっしゃる方なのね。

そういうエコのキャンプ場なんてどこにもないので、そういう指導員が居て、そういうのが湖畔端にあるなんていうのも面白いなと思ったり、それから、ちょっとした森があって、岡谷では、ロボットとか、なんかそんなものが凄く…この間も、新聞に出ていましたけれども…どっかいっちゃいましたけれど、機械とか、そういうロボット関係とか、そういうものが学生達が割りとやっているのかなという気がするんですね。そういうもので虫を作ったり…本当の虫じゃなくて、森があると、動物園じゃないけど…東京に行くと「ジブリの森」というのがあるんですけども、そういうロマン…ロマンチックでもなくて、お伽噺の何かが出てくるみたいな森があったら、また、それは面白いなと思うし、すごく出来るかどうか分かりませんが、私の頭の中から、子どもというものが全然離れませんので、そういうような施設みたいなものが出来たら、きっと人が面白がるかなと思うのと、それから、珍しがるとかという気がします。街並みをどうするかという意見は全然ないんですけど。

### ○ 倉田

ありがとうございます。私も、街並みみたいなことだけが、まちづくりだという感じはしていません。先程もちょっと申し上げたように、色んな場、活動の場をどうやって街の中に数多く作っていくかということが大事で、それがまさに先程申し上げた「選択できる」という…そういう意味で、私なんかも、この地には、昔は、結果としてかもしれませんが、そういう選択が随分あったということで…今のお話を伺っていて、当事としては、あまり違和感がなかったんですけど、私の小学校の先生が、よくキ

キャンプに連れ出したりして、そういう中で飯盒炊爨で飯を炊く炊き方からですね、それから、火の点け方から色々なことをもちろん習いましたし、それは、まさに当時は、その時はエコとかそういう話は全然していなかったんですけど、やはり、自然の持っている力とか、そういうものを知る機会には結果的になったと思いますし、私自身、諏訪でも上諏訪の街の中に居たんであれだったんですけど、中学に行って、もうちょっと諏訪市内でも…あまり大差は無いのかもしれないのですけれども、諏訪市内からすると少し田舎の子ども達と一緒にあって、彼らに魚の獲り方を教えてもらいまして、それも素手で獲る…川へ行って、こういう所に魚がいる、こういうふう to 獲るんだというようなことを教えてもらったり、それこそ、地蜂の…というような話とか、いってみれば相当恵まれた体験をしたんだなと後から分かりましたけれども、それは結果的に、やはり、そういうことを通して、自然というものを知っていく機会にもなりますし、あまり大上段に構えてエコというとあれですけど、そういう生活というのがあって、また、その豊かさがあるというのは、逆にいうと、今、地方都市でもそういうことが無くなっているのかなというふうに思いますから、それは一つ、色んな意味で、子どもを育てる環境という意味でも、こういうことというのは、一つのまちづくりのテーマにもなるだろうし、手掛かりにもなるだろうと、伺っていて思いました。いかがでしょうか、今井さんどうぞ。

#### ○ 今井

湖畔周辺のお話が色々出ていたので、そこにさらにということなんですけれども、実は、こういう会とは別の行政にも関わった会で「岡谷ブランドマネジメント」という検討委員会が持たれていると思うんですが、たまたま、主人がそちらの方に参加させていただいておりまして、その資料をちょっと見せてもらったんですね。そうしましたら、その中に「湖畔にある美しいものづくりの街」というところがございまして、具体的にいうと、駅南から諏訪湖までの、その環境を整えて、市民も来ていただいた観光客の方も、例えば、格好いい自転車に乗って、諏訪湖までスーッと出られるような、そんな街並みの形成というのがあるんですね。

で、それは、岡谷の駅南を考えた時に、もしかしたら、これは出来るかもしれないと私は思っていて、実際に、そこにお花が活けられている場所があったりですとか、ちょっとしたカフェが点在したりだとかいうところで、行きながら楽しんだり、湖畔に行って楽しんで、また、帰ってくる。一日回遊しながら楽しめるような所ができるかもしれないというのが、ここに少し実際の写真なども載っているんですけど、そういったものを見た時に「これはイケるかも！」というような思いがありまして、そういう、この会とは別に他でもまちづくりを考えている皆さんがいらっしゃるところで、是非、そういうことを上手くリンクさせて、先程のあまり岡谷に良い印象を持っていない市民も「こういうことができるかもしれない」って、実際に見せられた時に、やはり希望がわくと思うんですね。是非、そんなふう to この先市民の皆さんにそういったところが伝わるようにしていただけたらありがたいななというふうに思います。

あともう一つこの機会に…年齢層がどんどん上がっていったところでは、商売をしながら本当に感じているところです。3年前まではスタスタと歩いてこられたお客様が、今は本当に階段を上る時に手を差し伸べてさしあげないと上りづらいという状況になってきたり、「今日はどうにして

来て下さったんですか？」と申し上げると「バスが丁度良いのがあったからね」と。「じゃあ、帰りはどうされるんですか？」、「バスが3時間無いんだよ。だから、“フクシー”(福祉タクシー)で帰ろうと思う」とかね。うちでは、お帰りの時には送って差し上げるというなお声掛けをさせていただいております。そして、来ていただけない方は、お電話をいただければ…今日もこの後、一軒寄らせていただくんですけども、お届けもさせていただいております。商業者なりに考えながら、生活支援と共にさせていただいているところなんですけれども、でも、やっぱり、皆さんそれぞれに自分で選びたいだとか、自分の肌を診て欲しいだとかというご希望がある中では、「お届けしますよ」と言っても、「(店に)来ると元気になれるんだ」とか「ここに来ようと思うから、今日は朝からお化粧して、支度して来たんだよ」っておっしゃって下さる…そういうところが凄く大切なところではないかなと思います。

今、車に乗れる私も20年経てばどうなっているかなとちょっと心配になるんですけども、やはり、できれば、皆が、先程、先生がおっしゃたように、2km くらいの中で歩いて生活が成り立つような街にしていくべきだと思います。コンパクトシティとよく言われていますけれども、そういったところは岡谷市としても本当にこれから考えていかなくていけないところだと思っています。

街中、坂があると、やっぱり、お客様は「大変だ」とおっしゃいます。「あの坂、ちょっと市にどうにかして欲しいわ」とおっしゃる方もいらっしゃるんですけども、それがどうなのか私にはよく分からないんですが、確かに、坂の無い所の生活というのは、しやすいですし、歳を重ねたと時に、多分、自分も「この街に住んでいて良かった」と思うのではないかなと思います。平らな所にも、本当に空き店舗ですとか空き家ですとか空き地というのがありますので、あまり、郊外の方に新しいお家が建っていて素敵だなと思いますけれども、若いうちは良いですよ。だけど、もし、ちょっとこれは車運転できなくなると厳しいなと思った時に街に出てくる選択肢も是非設けておいていただきたい。例えば、介護付の老人の保養施設みたいな所ですとか、そこに住めるマンションみたいなものですか、そういった所も考えていかなくてはいけないところではないかなというふうに考えています。

やはり、ただ住めば良いというわけではなくて、うちにも、本当に「健康になりたい、子どもに迷惑かけられないから」と言って、お化粧品ではなくて、10分間で2時間の運動量という機械があるんですけども、それに毎日乗りに来て下さる方がいらっしゃいます。そういった健康づくりをしながら、快適に過ごせるコンパクトなまちづくりというのをこれから一緒に考えていかれたら良いかなというふうに思っています。

## ○ 倉田

ありがとうございました。非常にヒントといいますか、手掛かりになるようなお話だったんじゃないかなというふうに思います。最初にちょっと諏訪湖の湖畔の話が出たりしましたが、かつて、諏訪地域というのは“東洋のスイス”なんていうふうに言われていて、実は、ここ2年程、2回程スイスに行く機会があったんですけど、なんと、同じ湖であっても、こんなに違うのかなとは実感して、やはり、湖という資源を諏訪の地域…岡谷だけに限らないですけど、本当に上手にそういう資源を有効に使っているのかな…使うというと、なんかそこに物をドンドン建てたりというふうなイメージになるかもしれないですけど、そうじゃなくて、もう少し資源を生かす生かし方というのがあるのかなというか…

そんなことをちょっと感じたところですね。

それで、最初の方に話があった最近流行の“街のブランディング”というか、ブランドづくり、ブランド化ということがあるんですけども、私なんかが見ていますと、この地域というのは、随分、ブランドづくりをするための要素は色々あるなという気はしていますけど、ブランドというのは、ある意味では、必ずしもものづくりということではなくて、街自体をどういうふうイメージ的にも特化していくかということであると思うんですが、そういう意味で手掛かりは結構あるな。ただ、逆に色んな取り組みがバラバラなんで、やはりブランド戦略みたいなものを持ちながら、そこに、皆、色んな商業も、いわゆるまちづくりも含めて、皆、そういうものに向けて動いていだけでも、少し違ってくるのかなということは感じてまして…そういう意味で、今、お話があったようなこと。

それから、後半のほうで、ちょっとお話されてたような、多分、まちづくりというのはハードだけじゃないということ言うと、高齢化社会が進んでいくにあたって、もう少し生活支援の色んなサービスとか、そういうもの…今、多分、もちろん、お店なんかの個店レベルで色々努力されてやるサービスというものもあるんだろうと思いますけれど、そうじゃなくて、もうちょっと地域としてできるようなサービスというか、そういう支援の…行政が全部やらなきゃいけないとなっちゃうとあれなんですけれど…そうじゃないものもあるだろうし、その辺は、皆、色々なところも模索しているような気がして…最近では便利なんで、全部まちづくりを付ければできちゃうんですね。福祉のまちづくりとか、皆、全部、まちづくりが付く。

で、実は、私、日本建築学会というところで、まちづくりの教科書というのを12冊作りまして、それが全部まちづくりをくっ付けてますので、そういう本を…教科書といっても、学校で使うという意味だけじゃなくて、色んなところで使って欲しいということで…安心・安全のまちづくりというものもありますし、福祉もありますし、景観のまちづくりもありますし、とにかく皆まちづくりが付いているというのを作りました。だから、そういう意味では、まちづくりというのは、良い意味で、分かりにくいかもしれませんが、便利なんです。そういうものもまちづくりだというふうに、私は思っているんで、ソフトウェアの部分ですね。そういうものも併せて…今回、行政が言っている「都市計画マスタープラン」というものには、なかなかその辺までは組み込めないかもしれませんが、まちづくりというのは、それも含むものだというふうに思ってますので、あまり限定しないで、色んなことを、ご自分の生活の中で気になっていることを手掛りにやっていくということで、随分違ってくるんじゃないかなという気がしていますね。

他にいかがでしょうか？ 特に、今日は色々手掛かりになるようなお話をいくつかいただいて、ただここは、恐らく、ちょっとしたアイデアをお出しいただいたということで、それをまとめるような、そういう場でもないと思いますので、逆に、今度は、今日お出でになっている、来られている市民の皆さんに対して呼びかけでも結構ですし、少しこんなことを一緒にやりませんかというようなこと、何か岡谷市民の皆さんに伝えたいことがあったら是非…時間的には最後になるかもしれませんが、言い残したことも含めておっしゃっていただきたいと思います。じゃ、どうぞ片倉さん、いかがでしょう？

## ○ 片倉

皆さんのお話を聞いておまして、これからのまちづくり…ハードな面、ソフトな面、色々ありますけれども、人間それぞれ価値観も違いますし、先程、先生がおっしゃった「価値は生活している人が選ぶ」ということで、皆さんそれぞれ個性があると思うので、そうした繋がりがあった個性をいかに大事にしていくかということが、やっぱり大事だと思うので、人と人との関係だとか、歴史や文化的な価値を高めるために街を理想の街に作り続けていくということが必要だと思うんですね。

だから、「10年、15年経ったら壊せばいいや」という考え方ではなくて…これはソフトもハードもそうなんですけど、やっぱり、考え方を付加していくということが非常に大事だと思うんです。で、やっぱり、そうしていかないと生き延びれないし、現状を省資源にしていく必要があるんで、そういったところは、皆でちゃんとやっていかなくちやいけないなと思うんです。

それで、直接、市民の方に関係あるかというとなんですけど、建築家の出江寛(いずえ・かん)さんが「建築設計は美学・哲学・技術の結晶」ということを言っているんですけど、「設計図というのは物ではない」。要するに、会計法の…僕は、入札制度というのは非常に合わないと思うんですね。恐らく、入札をやっているのは日本だけであって、建築は民間のものであれ、公共のものであれ、非常に社会だとか、都市文化環境だとかに多大な影響を与えていくと思うんですね。

ですので、これは日本全国の行政に言えることなんですけれども、設計料…金額だけで決めるということは止めたほうが良いということを言いたいのなんですけれども、公共建築が実績主義のプロポーザル・QBSというのをやっているんですけど、そういうことでもなくて、子ども達を育てるということを考えていくと、良いアイデアを募集して、もし、その子のアイデアが凄く夢を与えるものであったら、専門家がサポートしてでも、良いものは良いので、そういったアイデアを作り上げていくような体制というのが、僕は必要だと思うんですね。

で、もう一度、先生のお話に戻りますけれど、「価値は生活している人が選ぶ」と。ですので、岡谷市こそ全国の見本となるように、市民自らが市民の共有する理念みたいなものをまとめあげて、市民によるデザインレビューとか、相応しい設計者の選択とかも含めて…例えば、この建物は誰が(設計するのが)相応しいかということも含めて、要するに自分達の価値に合う人を選ばないと、やっぱり、設計というものは失敗してしまいますから、どういうものを作るかということで、信頼できる人に依頼しないとまずいと思うんですね。あの、お腹が痛くなった時に、よく言われるんですけども、お医者さんにかかる時、一番安いお医者さんて選ばないでしょ？やっぱり、信頼している人を選ぶわけですから、やっぱり、設計者も同じだと思うんですね。それくらい、やっぱり、人間の尊厳に関わってくる問題が、まちづくりに僕はあると思うんです。ですから、そういったところも含めて、まちづくりに皆が参加できるようなステージづくりというのも、今後、手伝っていただけたらと思うんですけども、先生、その辺はどうでしょう？

## ○ 倉田

私自身も、今、片倉さんがおっしゃっていたようなことについても、色々なところで、色々な…行政に対する働きかけとか、実際、私自身も関わったところでは、そういう新しい専門家の選定プロセス

というのを積極的に導入していただくようなことを、色々、私も試みております。ただ、今日、そのことだけを議論する場じゃないんで、もう少しちょっと広げて話をさせていただくと、やはり、基本的にまちづくりという、そういう中でも、ある意味で、人的資源というのは凄く大事であって、その時に…もちろん主役は、私は、市民であるというふうには思いますけれど、市民だけでできないことも非常に多い。そこには、やはり、それなりに専門家が関わっていく。それは、必ずしも、建築家とか、そういう人達だけではなく、まちづくりですから、かなり広い色んな分野の専門家の人達が関わっていくということが必要になってくると思うんですが、その時に、どういう人にそこに関わってもらおうかということ…それは、ただ、恐らく、単純にお金が安いからその人に頼んでもらうということではないでしょ？という…そういうことだろうと思うんですね。

ですから、やはり、正直言って、建築家と言って設計している人達も、設計料というのは、とにかく大したことないんですよ、思い切り払っても。それで生活できていなくて、我々の周りを最近見ても、廃業する人達も出てくるような状況ですから、そんなに割りの良い仕事ではないんですけれども。

ただ、逆に、専門家の力をまちづくりの中に積極的に生かして、恐らく、岡谷市の中にも、色んな立場の専門家の方がいらっしやると思いますんで、そういう人達にきちっと色々な形で関わってもらう時に…まあ、もちろんボランティアレベルでやれることは…というのは当然あると思いますけれども、もうちょっと専門的にちゃんとした業務としてやらないといけないというような時には、やはり、その人達の持っている力とか提案の内容とかいうものをちゃんと評価して人を選ばないと。安けりやいいという、何か物を買うのとはちょっと違うという辺りが、その辺の問題なんだろうなということを、恐らく、片倉さんはおっしゃりたかったというふうに思ってます、それは私も実感しているところです。

そのころだけで議論しようとする、また色々ありますけれど、いずれにしても、私自身は、人的な資源というのをどうやって岡谷市で活用していくかということが、まちづくりの中でも非常に大事だと思いますし、あとは、先程、ちょっとご紹介した茅野市の市民館の建て替えといいますか、それに関わって、そのプロセスの中にいかに沢山の市民の人的資源を発見したかということが、非常に私としては大きかったですね。

本当に人それぞれで、皆色々な能力を持っていて、関わってくる市民の方たちも最初はそれをあまり自覚していないんですけど、色々一緒になってやっていくうちに「ああ、この辺は自分の力になれる部分だな」ということが分かってきて、最終的には、そういう人達がそれぞれの立場で…中には、本当に専門的なところを、知識を生かして、茅野市民館の企画そのものを受けて、それを全部やり切るというようなことをやっている。まあ、NPOを作った人達もいますし、そうじゃないもうちょっと違うレベルで…ボランティアレベルできちっと…美術の好きな人達が美術館の恒常的な業務をきちっとやっておられたりとか、色々なことがありますので、そういう意味で、まちづくりというのは、人の資源を、また、発掘する機会でもあるし、それをまた育てる機会でもあるということで…そこは、非常に、まちづくり…色々な成功している所を見ると必ず人が居るということは確かなんで、やはり、まちづくりというのは人なんだなと…人を扱うことでもあるし、それをやるもの人だという意味で、その辺は、非常に大事なことだなというのは、ちょっと感じています。いかがでしょうか？すみません、私は、

もうあんまり喋りませんから。最後に、少し、是非、おっしゃりたいことがあれば、是非、おっしゃっていただきたいと思いますけれど、いかがでしょう？はい、じゃあ、今井さん、いかがでしょう？

#### ○ 今井

やっぱり、なかなか一般の市民がまちづくりに関わっていくというのは、そういう機会を設けようと会を開いても、自分も行ってみても良いものかどうかというところがどうかと思うんです。今日、私の正面に来て下さっている方、新聞を見て「出るんだってね？聞きに行くからね」と言って下さった女性の方が、お客様でいらっしゃるのですが、私は「動員がかかったの？」と聞いちゃったんですね。色々と活動されている方なので、「来てください」という動員がかかったのかなと思ったら、「ううん、かかってないよ。ほら、私、変わり者だからさ」とおっしゃるんです。「参加自由」と書いてあると、その方曰く「皆、自分は直接声が掛かってないから、行っちゃいけないものだと思うみたいなんだよ」っておっしゃるんですね。それは、「そこに関わっている方達に声が掛かっているもので、一応『参加自由』と書いてあるけれども、だいたいそういう所に私は変わり者だから行くだけだね」というような感覚でいらっしゃるんですけども、凄く貴重な人材だなんて私は思って、実は「(登壇するのを)代わりますか？」という話を、その時、させていただいたんですけども、街の中にはそういう本当に一所懸命活動を自分の脚でしている方がいっぱいいらっしゃると思うんですね。その方達が、より活動しやすくなる、また、その方達のアイデアが取り上げられて反映されていくようなシステムですとか、仰々しく一から十まで完成したものは中々できないんですけども、ちょっとこのアイデアを言ったら行政の方が一緒に考えて下さって、十になったみたいな、そんな受け皿があると良いなと思います。

私は商売をさせていただきながら、色々な方とコミュニケーションを取らせていただいて、色々な方の人生に関わらせていただいて、ちょっとずつ関わらせていただいて、それを皆さんと元気を分かち合っているちょっとした社会貢献というか、関係づくりかなというふうに思っているんですけども、例えば、何か意見を言いたくても「そんな私なんて…」という方が、商店で、例えば私と話をしながら、「こうなんだよね、ああなんだよね。シルキーバスもこうだと良いんだけどね」なんていったことをちょっと書き取って私の方から、商店から市役所の方にお伝えするというような、そんなようなシステムがあれば、ちょっとお手伝いもできるのかなと思ったりしています。

私、これに参加させていただいたのは、声を掛けていただいて、お断りすれば楽だったんですけども、参加することで一つ関わりかなと思いましたので参加させていただきました。ありがとうございました。

#### ○ 倉田

ありがとうございます。おっしゃる通りで、私も色々な所で市民参加のまちづくりと言うんで、色々お手伝いすることもありますけれど、最初からそんなに上手くいくとは限らないし、ただ普通に声を掛けると「また、同じメンバーか」というような形だったりすることも現実ですね。

ですから、それは少し工夫が必要で、それは、なんと言うんですか、工夫していかなきゃならない

と思うんですけど、市民側にも行政不信みたいなものがあるんですね、「所詮、言ったって…」とか、形式の市民参加で「もう、決まっているんだろ？」というようなところも、もちろんありますし、逆に、行政は行政で、ある意味では「なんか、うるさいことを言う人達が、また来て、それが増えるだけだったら敵わない」というところが正直あります、それは本音として。それは、現実としてそうだったからということでもわるわけですけれどもね。そこを少しずつ変えていかないといけないのかなというふうには思います。

そこを克服している街も無くはない。全て完全ではないにしろ、ちょっとずつ変わってきていることはあって、行政と市民の関係というのは、もうちょっと、改めて市民参加をしなければいけないからといって、そこで何かいきなり変わるわけじゃなくて、ちょっと別なところで実は市民と行政の間の信頼関係が上手に少しずつ出来上がってきているという所は、何か次のきっかけがあると上手な次のステップに繋がっていくということがありますので、是非、その辺は、また…よく言うんですけども、“岡谷方式”みたいなものができれば、この市民参加についていうと、なかなかどこでも成功するというものではなくて、その場所に合った…そのためには、やはり、現実の市民の方達の活動を充分把握して…それがあまり表に出ていないものもあるんですけども…そういうところを見ながら、上手くそういうところを経由して、参加する機会を作っていくというようなことがないと、なかなか改めて…結構、公の場合「皆、来て下さい」と言っても、多分、それは中々来にくいかなということがあります。それは、最近では、参加するための方法というの、少しずつワークショップという…一言で言っちゃうとあれですけども、色んなやり方が出てきているので、それはそれで出来ると思うんです。

いきなり「提案してください」と言うと、皆、ちょっと躊躇しちゃいますけれども、非常に興味のあることで、「こんなことしませんか？」と、はっきりと何か楽しくやろうというような感覚でできることがあれば、それは結構来ると思います。例えば、街歩きだつてそうだと思いますけれど、楽しければ来ますし、その街あるきの中で実は色んなものに何か気づいて、結果として、こんなことを皆が言うというようなことをなっていけば良いわけですから、なんか少しそういうふうにしていかないと、なかなかその部分は変わらないかなという気がしますね。すみません、また喋っちゃいました。ごめんなさい。すみません、どうぞ、さとうさんいかがですか？

## ○ さとう

私はくだらないことしか思いつかないですからね。駅を降りて、岡谷駅を降りて、自分が家に帰りたい時にどこを歩いていって良いか分からない時があったんですね、まだ、来たばかりの頃。で、その時にどこで聞いたら良いのかとか、そういうのが分からなくて、もしかしたら、そういうのを聞くとパッと出てくるような建物…なんていうの？お人形みたいなのが居て、ロボットみたいなのが居て、そして、街の角々にそんなものが居たら面白いなとか思ったことがあるんですね。

とつても、子どもじみた考えばかりを思いつくんですけどね。そういうロボットに出会う街なんてどうかなとか思ったんですけど…そういうつまらないことなら思いつきます。

## ○ 倉田

ありがとうございます。でも、そういうレベルのと言ったらなんですけれども、結構必要で、それが何かきっかけに現実になることも無いわけじゃないと思います。ちょっと私が喋り過ぎたのもあって、少し時間がもう来てしまいましたけれども、先程申し上げましたように今日の話全部まとめるというよりは、恐らく皆さん聞いていただいている、色々、聞かれている皆さんの側にも「そんなことだったら、俺はこんなことがあるぞ」というようなことで色々気がつかれたことが色々あったりすると思います。やはり、それが少しずつ固まりになっていって、初めて街の将来像みたいなものも見えてくるんだろーと思いますし、特に新しい時代、改めて、これからの岡谷市の将来の姿というのを描くためには、そういうところからスタートしていかなければいけないんじゃないかな。そういう意味では、今日、4人の皆さん、少しずつご経験が違うところで、色々手掛かりとなるようなお話はあったんじゃないかな。もちろん、限られた時間ですので、全てをここで語り尽くせたわけではないと思いますが、是非とも今日この会場にいらしている皆さんには、こういう壇上ということではなくても、やはり同じような立場で是非この仲間に入って、一緒に岡谷の将来を一緒になって考えたり、考えるというよりも行動していただけたらなということは強く感じております。

そういう意味で、ちょっと限られた時間とちょっと司会進行があまり上手じゃなかったんで、皆さんの言いたいことを全部お話していただいたかどうかは分かりませんが、今後の岡谷市のまちづくりに少しでも皆さんの話が生かされたらなと思っております。 どうもありがとうございました。

## ○ 司会

どうもありがとうございました。倉田先生はじめパネラーの方々から大変貴重なお話をいただきました。行政にとって少し頭の痛いお話もございましたが、岡谷市のまちづくりを今後とも進めていく、市民の方々と共に進めていく、大きな、沢山のヒントをいただいたと思います。そうでは、以上でパネルディスカッションを終了させていただきます。倉田先生、パネリストの皆様、もう一度、皆さん、盛大な拍手をお願いいたします。

なお、お知らせですが、このシンポジウムを機会に今後まちづくりの懇話会、それからワークショップ等を開催する予定でおります。ご参加を希望される方々は、アンケートに連絡先をご記入いただきまして、改めてご連絡をいたしますので、受付でお返しをいただけたらと思います。以上をもちまして「まちづくりシンポジウム」を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。

以 上